

うちに來るって本氣ですか？

作 石原美か子

(上演時間 約九十分)

演劇ぶっく・ニュークリエイト出版共催戯曲コンテスト・優秀賞受賞(二〇〇一年)

「演劇ぶっく社 ヨムゲキ100シリーズ」より出版(絶版)

【登場人物】

御殿場 縁 (ゴテンバ ユカリ)	長女 二十九歳 中小企業勤務
御殿場 太一郎 (ゴテンバ タイチロウ)	長男 二十七歳 ミステリー作家もどき
御殿場 真琴 (ゴテンバ マコト)	次女 二十四歳 大学院生
御殿場 忍 (ゴテンバ シノブ)	次男 二十二歳 大学四年生
御殿場 百子 (ゴテンバ モモコ)	三女 十九歳 浪人生
蝮田 聖巳 (マムシダ キヨミ)	二十八歳 フリー編集者
相良 不見夫 (サガラ フミオ)	二十九歳 縁の紹介相手 保育士

【場所】

御殿場家の居間

暗転中 シリアスで重厚な曲が盛り上がる。

明転 居間に佇む縁が照らし出される。

縁、パソコンのディスプレイを見つめ、困り果てた顔で固まっている。手に持った袋からヒマワリのタネが、ペット用食器へと止めどなく注がれている。

呼び鈴の音。

近所の人（声） 御殿場さーん。回覧版ー。御殿場さーん。

縁、気づかずに固まったまま。

百子（声） はい。

百子、居間の縁には気づかずに廊下を横切る。その途中、足元の何か（座敷童）を手ですくい上げ、肩に乗せて玄関へ。やがて百子、回覧版を手にして、居間へ入ってくる。縁を見てギョツとする。縁が見てギョツとする。が、何も言わずに、まず、奥の間の襖を開ける。

百子 お爺ちゃん。テレビちょっと小さくしてくれる？ ごめんね。お茶はいい？ そう。

シリアスな曲、消える。
百子、まじまじと縁を眺めて、

百子 何してんの、縁姉ちゃん。

縁 （すぎるように）百子。

百子 なに。

縁 駄目だ。

百子 へ？

縁 もう駄目、あたし駄目、どうしよう、百子。

縁、ヒマワリのタネ袋を振り回しながら百子に詰め寄る。
ばらまかれるヒマワリのタネ。

百子 ちよつと、ちよつと、お姉ちゃん。

縁 もうって言うか、もともと駄目なのよ、あたしそういうのは。（混乱しつつも嬉しそうに）男の人とか、お付き合いか、もう全然駄目。駄目にできてるの。駄目もと。駄目もと？それちよつと意味違うわね。ああとにかく、駄目な私にいきなりこんな追い風、追い風？違うわね、討ち入り？違う違う、追い討

ち。そう、追い討ちが……

百子 ちよつと待った。タネ、ヒマワリ、タネ。

縁 (床見て) あ、こぼれてる。(袋見て) あ、すごい減ってる。

百子 何やってんの。

二人、こぼれたタネを集めながら、

縁 ごめん。いや、あの、今ね、ステキチにこれをあげようと思っ
て。で、何気なく覗いたらメール届いてて。

百子 え、例の結婚情報サービス？

縁 しっ。

百子 大丈夫。みんな部屋だよ。

縁 ほんと？

百子 お母さんは？

縁 道明寺さんとこ、お茶しに。お父さん、出張だから。

百子 そりや当分、戻って来ないね。(声を潜めて) どうかしたの？

縁 本当に大丈夫？

百子 平気。真琴姉え、昨日から徹夜で論文やってる。忍兄いは、ま
だ寝てるんじゃないかな、帰り遅かったし。

縁 太一郎は？やけに静かだけど。

百子 べ切前みたい。ここには出て来ないってば。

縁 うーん。

百子 (タネが山盛りになった器を見て) うわ、こんなに食べたラス
テキチからヒマワリが生えちゃうね。

縁 はああ。

百子 なに。

縁 またサラッとそんな可愛いこと言って。この小悪魔。(メモをと
る)

百子 (無視してディスプレイを覗き込み)「こんにちはユカリン」……
ユカリン？

縁 ひゃあああ。(奇妙な格好で悶える)

百子 しいっ。

二人、周囲を伺う。
百子、立ち上がって祖父の部屋の襖を開け、

百子 (祖父に) 何でもないよ。大丈夫、寝てて。(縁に) もう。

縁 ごめん。だっていきなり。

百子 なんだ、結構いい感じなんだ？

縁 そんな、べつに。

百子 (ディスプレイを覗いて) サガラ、フミオ？

縁 あああああ。

縁、いきなり立ち上がって壁のカレンダーにへばり付き、
 (カレンダーには百子の模擬テストの日が丸してある)

百子 やめて。どれが模擬テストの日かわかんなくなっちゃう。

縁 あんたが、いきなりそんな、名前なんて言うから。

百子 もう何なの、一体。言つて。

縁 会いたいつて言われちゃったの。

縁・百子 ……

百子 (頷きながら拍手)

縁 (照れて) やめてよ。

百子 それって、いつ？

縁 今日の夜。突然。

百子 デートだ。

縁 いやああああ。

百子 しっ、お爺ちゃん、びっくりして、寝たきりなのに歩いちゃうよ。

縁 ごめん、ほんとにごめん。

百子 何処行くの？

縁 わかんない、駅で待ち合わせしようって。

百子 ほんとにデートみたい。何着てく？

縁 え。

百子 服。あるの、お姉ちゃん。

縁 服？

百子 第一印象って大事だよ。すごく。

縁 服っ？服っ？

百子 もしあれなら、真琴姉えに借りれば……

縁 駄目よ、そんなの。皆にバレちゃうでしょ。服??

縁、居間にある洋服掛けから服を外してばらまき、選び始める。

百子 いいよ、もう知られたって。お父さん、喜んで入会金くらい出してくれるよ。幾らだっけ? 結構高いんですよ。入会金と紹介料で……あれ、こういうのって何年契約とかあるの??

縁 二年。

百子 そうなんだ。で、幾ら??

縁 税込み三十六万。

百子 高っ。お姉ちゃん、お金持ちなんだ。

縁 払ってないわよ。まだ。分割。決まってるでしょ。

百子 分割。

縁 月一万円ずつの三十六回払い。

百子 って、三年? 契約二年で支払いは三年??

縁 幸せは一生。

百子 ポーナスは? 出たんでしょ??

縁 出るわけじゃないじゃない、あんな小っちゃいところ。出たことないわよ。寿退社したって祝い金も出ないわよ。それより退職金だつて出るんだか出ないんだか。ああそうだ、百子。

百子 ん??

縁 三千円、返して。

百子 (ディスプレイを眺めてわざとらしく) ああつ。相良さんもポストペット使ってる。

縁 あ、そうそう、そうなの。

縁、ばらまいた服を片っ端から羽織り始める。
百子はディスプレイを凝視したまま、縁の行動には気づかない。

百子 なに、このネズミ色のって。コアラ??

縁 ああそれ、相良さんの。大仏。

百子 だいぶつ??

縁 大仏。ボブっていうの。

百子 ……ふうん。あれ、お姉ちゃんのとて象じゃなかった? ピンク色

のやつ。

縁 ああ、タイチロウ？

百子 お兄ちゃんの名前、つけてたの？

縁 言わなかった？少し前にあの子、ネタが思いつかないとか言って暴れたでしょ、台所で。その時、あたしのお茶碗割ったの。頭きたからポストペットにあの子の名前つけて、こう、がんばらんクリックして殴ってやったの。したら二三日前に家出しちゃったみたい。いなくなっちゃった。

百子 ひどい。

縁 すぐ戻って来るって、説明書にそう書いてあるから。

百子 可愛かったのに、ピンクの象。

縁 白よ、ほんとは。叩いたからピンクになったの。

百子 ……

縁 だから今は小鹿。ババンビちゃん。(ディスプレイを覗いて)あら、ボブと仲良くしゃって。いやーん。あたしと相良さんを見てみたい。なんて、言っちゃった、もう聞き流して、百子たらっ。

百子、とんでもない重ね着をした縁を目の当たりにする。絶句。
パソコンから妙な音。(相良のポストペットが出て行く合図)

縁 あ、ボブ帰っちゃった。

百子 驚くよ、ボブだって。いくら地蔵だってそりゃ見放すよ。

縁 なに、やっぱりこの襟の形、似合わない？

百子 ー、もつとこうグローバルな意味でびっくり。

縁 ええっ、どうしたらいい？

百子 何て言えばいいのかなあ。あ、そうだ。お洒落を真似したいとかかいないの？ほら、真琴姉えとか結構格好いいじゃん、いつも。

縁 ああ、そうね。あと、マリちゃんとか？

百子 あ。知らないの、お姉ちゃん。

縁 なに。

百子 忍兄い、フラれた。

縁 マリちゃん？

百子 しかも、二股。

縁 二股？ちよつとちよつと、それ、どういうことよ？

変な格好のまま、縁、座り込んで話に身を乗り出す。

百子　ゼミのOBとも付き合っていて、で、そっちが結婚話にまで進んだみたい。その相手っていうのが司法試験受かったすごい人。まったくこれだから、ちょっと愛嬌のある顔してると……落ち込んでるでしょ、忍。

百子　見てらんない。就職活動だって全然なのに。

縁　全然？まだ？

百子　諦めちゃうかも。フラれてから、何か、合コンとか。

縁　合コン？あの子が？だからなの、あの靴。

百子　厚底の？ヒールがこんなにある？

縁　そうそう。

百子　痛々しいよね。この前も、こっさりあたしの部屋に来て、俺の運勢どうなのか座敷童様に訊いてくれないか、って真剣な顔でさ。あたし、もう何て言ったらいいかわかんなくて。

縁　ああ、座敷童様に。

百子　そう。恐くて訊けるわけないよ、忍兄いの運勢なんて。良いはずないし。

縁　そういやいたわね。そんなのも。今もいるの、ザッシー。

百子　（見回して）いるよ。何で？

縁　ねえ、服のこととか訊いてくれない？もともとザッシーの薦めるところに入会したわけだし。

百子　ほらそこ、お姉ちゃんの目の前。おっと……

座敷童、テーブルの上を走っているらしい。百子が目で追う。やがて、ディスプレイの前で止まったらしい。同時に、メール着信の奇妙な音が鳴る。

縁　あ、ボブ。

百子　また来たよ。ボブ。

縁　（座敷童がいるらしい位置を握り締めて）なに、このメールが何なの、読んだほうがいいの、読まないほうがいいの、はつきり言って。言いなさい。言え。

百子　潰してる、肘で潰してる。

縁　（メールに注目して）え、「緊急連絡」。

百子、縁の肘の下から座敷童を救い出し、耳を寄せる。

縁 なになになに。「今夜、お会いする予定でおりましたが……結婚を前提としたお付き合いになるかと思われそうです……当方としては、ご家族親族の方々とも親しくさせていただきたいと……恐縮ですが本日、直接……

縁・百子 うちにやって来るのお！

家の奥からガタガタツという物音が響く。

真琴（声） 何だ、これはあ！

真琴、論文や資料やらを手に居間へ駆け込んでくる。

縁 真琴？

真琴 （指先を見つめて）ちよっと何なの、トイレのノブに何か刺さってた。いったあーい。

百子 どうしたの。

真琴 何かチクツした。針みたいなの。何なの、もう。全然論文、進まないじゃない。昨日の夜だって、隣から忍の嗚咽が漏れてきて。

縁 嗚咽。

真琴 マリちゃあんって。で、不意に面接の練習始めるのよ、えー御社を志望した動機は……で、また急にマリちゃあん……って、もう何度怒鳴り込んでやろうかと……（縁の格好を見てサラッと）あ、お祭りって今日なんだ。

縁 ええと、修士論文？

真琴 来週、中間発表。あ、夕方から研究室行くから。お昼早くしてくれる？

縁 出掛けるの？どうせなら早く行けば？今すぐとか。

真琴 なんで。

百子 （割って入って）トイレで論文書くのやめて、長いんだもん。

真琴 あそこってメモ用紙に困らないから。（タネを見て）何これ。

縁 ステキチのおやつ。

真琴 ああ、今年も咲いたよねえ。あつ。

縁 なに。

真琴 （指先を見て）何これ、ピリピリしてきた。

百子 刺したとこ？

真琴 何これ何これ何これ。

縁 まさか、毒針だったとか？

百子 何でうちのトイレに？

真琴 うわうわうわ。

縁 しっかりして、真琴。

真琴、一瞬フラリとなるが、勇ましく指先の毒？を吸い取って吐き出す。

真琴 ペっ。：：大丈夫。

百子 大丈夫なの？

真琴 平気。慣れてるから。ヘッポコ兄貴のやることなんか。

縁 え、太一郎？

真琴 始まったんでしょ。また。あのヘッポコのスランプ。

縁・百子 あーっ。

太一郎（声）ヘッポコ、ヘッポコ、言うんじやない！

太一郎、牛乳パックを手に居間へ飛び込んで来る。

太一郎 俺の仕掛けた密室トリックに引っ掛かっておきながら、何をほざいている、真琴。

真琴 ヘッポコ雑誌にヘッポコ連載してるヘッポコ作家のヘッポコトリック？

太一郎 ヘッポコヘッポコヘッポコヘッポコ、言うな。

真琴、太一郎を無視して論文を書き始める。

太一郎 うちの今にも取れそうな指先のドアノブに救われたな、真琴。本来ならお前はチクツとした指先の痛みなど気にせず、に入リ、ドアを閉めて鍵を掛け、便座に腰掛けた途端、体に異変が襲いかかる筈だったのだ。そして俺はこっ所りノブから針を取って捨てる。どうだ、これで完全な密室だ。どうだどうだどうだ。どうだ。

縁 （遮って）太一郎、牛乳はコップで飲みなさい。（コップを渡す）

太一郎 あ、うん。

百子 もう。スランプになる度に密室トリック仕掛けるの、やめてっ
てば。

太一郎 いいか、モモ。小説書くっていうのはな、イメージトレーニン
グが大事なんだ。だから兄ちゃんはこうやって：：
縁 座って飲みなさい。

太一郎 あ、うん。(正座する)
 百子 イメージじゃないじゃん、実際に仕掛けてるじゃん。お爺ちゃ
 んとか、ステキチが引っ掛かったらどうするの。
 縁 あんた、針に何塗ったの？
 太一郎 え、オロナイン。
 百子 なんで。ピリピリするって…
 真琴 (おぎなりに) ごめん、スースーする、だった。
 太一郎 だって刺さったら血、出るから。(縁を見て) あ、祭りって今日
 なんだ。(タネを見て) なんだこれ？昼飯？
 縁 あんたステキチにあげてきてよ。
 太一郎 俺？
 縁 最近、全然面倒みないじゃない。
 太一郎 (聞いてない) 昼飯まだ？母さんは？
 百子 道明寺さん家。
 縁 ちよつとあんた、聞いている？
 太一郎 何か作って。
 縁 なんでいつも私なの。たまには真琴やって。
 百子 あたし、そうめんはもうヤなんだけど。
 真琴 ああもう。ちよつと静かにしてくれる？牛乳飲んでるヒマ
 あるんだから、自分でやれば？
 太一郎 べ切。それどころじゃない。
 真琴 あたしだって忙しいの。あたしの論文は、ちゃんと、世の中の
 役に立つんだから。邪魔しないでくれる？
 太一郎 あ、今の聞き捨てならないな。(腰を浮かす)
 縁 座って飲む。
 太一郎 (正座し直す) どういう意味だ、真琴。
 真琴 そうだ、あたし、トイレ入ろうと思ったんだ。(立ち上がる)
 太一郎 おい。
 百子 (太一郎を抑えて) ね、ね、真琴姉え。
 真琴 なに。切羽詰まってんだけど。
 百子 あのさ、さっきって、ノブに触っただけなの？
 真琴 そうよ。

縁　　なんで。

百子　　じゃ、あの凄い音、何だったんだろう。

縁　　あつ。

真琴　　二階の方で聞こえた気がするけど……

縁・真琴・百子　　……

百子　　忍兄いだ！

百子、走り出しかけてハッと振り返り、
テールの上から見えない何か（座敷童様）を肩に乗せ、
居間から飛び出して行く。

太一郎　　（座敷童様のいた位置を見て）ここ？ここにいたの？ザッシー？

真琴　　本当に見えるの？あの子。

縁　　あんた、忍の部屋にも何かしたの。

太一郎　　死ぬようなトリックじゃない。

真琴　　忍じゃ死ぬって。

縁　　ほかにもどこか何かしたの。

太一郎　　（重々しく）姉ちゃん、俺にとっては、この家すべてが密室なんだ。

縁　　（半笑い泣き）何を言ってるの？

真琴　　玄関のも何かしたでしょ。鉢植えがずれてる。

縁　　やめて、今すぐこの家を普通にして、お願いだから。

太一郎　　駄目なんだ、それはできない。

真琴　　どこに仕掛けたか自分で覚えてないんでしょ。

太一郎　　さっさと便所行け。

真琴　　べ切なんて過ぎてるんじゃないの。どうせ。

太一郎　　（動揺して）何を……

真琴　　また泣かれるよ、担当さんに。何だっけ、あの、すごく人の好きさそうなおじさん。

縁　　丸紅さん。

真琴　　そうそう。あんな福耳の人、泣かしたら罰当たるって。

縁　　過ぎてるの、べ切。

太一郎　　いいだろう、そんなこと。あとはもう、ちよいちよいと書くだ

けなんだ。ただやっぱりこう、目の前で誰かが引っ掛かってくれないとやる気が……

縁 そんなこと言わないで。困る。今すぐ家をちゃんとしてくれな
いと……

真琴 誰か来るの？

縁 ……

百子（声） お姉ちゃん、ちょっとちよっと助けて。

百子に抱えられ、首やら体やらにロープを巻きつけたパジャマ姿の忍、朦朧としながら居間へと倒れ込む。

縁・真琴 忍！

縁・真琴・百子、慌ててロープを外し、忍を何とか座らせる。

縁 しっかりして。眠っちゃだめ。

忍 （ハツと意識を取り戻し、畏まって）……あ、勤務地は何処でも構いません、僕、次男なんで……

百子 忍兄い、ここは家だよ。

忍 （周りを見回して）えっ。

真琴 大丈夫？

忍 夢か。

縁 面接？

忍 うん。やけにきれいな花畑に建ってる会社だった。

縁・真琴・百子 ……

縁 お水、持って来ようか？

忍 いや、いい。（縁を見てサラッと）あ、お祭りって今日なんだ。

太一郎 ダラダラダラダラ、昼過ぎまで寝てるからこんな目に合うんだ。

真琴 あんたのせいでしょ。

忍 兄貴。

太一郎 百子に救われたな。相変わらずガキだなあ、お前は。

百子 ちよっと、お兄ちゃん。

真琴 ほら、黙ってないで、お前も何か言い返せ。

忍 ダラダラ？年中ダラダラしてる奴に言われたくないな。

縁・真琴・百子 おっ。

太一郎 なんだ？

忍 いや、別に。何でもない。ま、就職活動もしたことない奴に言っても、どうせ無駄だし。

太一郎 ……

忍 こんなわけわかんない悪フザケばっかやっててさ、仕事してるんだか、してないんだか、家に金も入れないでさ、縁姉ちゃん見習えよ、会社潰れかかっているのにちゃんと金、入れているんだぜ。

縁 別にそんな。当たり前よ。

忍 大体、兄貴、縁姉ちゃんのこと、考えたことあんの？あんたがそんなだから、姉ちゃん、結婚諦めたんじゃないか。

縁 諦めてないわよ。（忍の首を締める）

太一郎 姉ちゃん、姉ちゃん。（思わず止めに入る）

百子 死んじゃう、今度こそ死んじゃう。

縁 （我に返って） あ、あたし一体。

真琴 お姉ちゃん。

縁 なに。

真琴 諦めてないんだ。

縁 えっ。

忍 どのいつもこいつも結婚しちまえばいいんだ、ちくしようつ。

真琴 あ。あんたフラれたでしょ、マリちゃんに。

忍 百子。

百子 言っていない、言っていない。

太一郎 マリちゃん、あの愛嬌のある子か。顔立ちが前方後円墳みたいな。

忍 うるさい。

真琴 昨日、あんたのいない時、マリちゃんから電話あったよ。

忍 えっ。マリちゃんから？

真琴 暗い声して、あんたの夢を見たとか言って。

忍 俺の夢を？

真琴 そう、あんたがいきなり赤ん坊を抱いて訪ねて来て、「あなたの子よ」って彼女に迫ったんだって。

忍 何だよ、それ。

太一郎 その赤ん坊ってのはやっぱり前方後円墳型の…

忍 うるせえ。それでマリちゃん、何て？

真琴 忍君に体調の変化はありませんかって。

忍 ないよ。あるわけないだろ。

縁 そうよ。何言ってるの。あるわけないじゃない。

忍 言ってるよ、縁姉ちゃん。

縁 だってまさかそんな。…私より先に？

忍 先にも後にもないの。

百子 でもマリちゃんってそういう、何て言うの、勘、鋭かったし。

太一郎 そういやザッシーも見えたとか言ってる。

真琴 百子の話に合わせてくれたんじゃない？

百子 そんなことないよ。

縁 じゃ、まさか予知夢？私より先に？忍が？

忍 勝手に話進めるなよ！だから俺は男だから赤ん坊なんて…

メール着信音。

忍、目の前のディスプレイをつい眺める。

忍 「緊急連絡、その二」。

縁・百子 うわああ。

慌てふためく縁と百子、忍を押し退けてパソコンを隠そうとする。
突き飛ばされて倒れる忍。そのまま忍、失神。

真琴 緊急連絡？

太一郎 っつて、何事？

真琴 あ、とうとう会社が潰れたとか？

縁 え、ええと。あの…

忍 (目を覚まして朦朧と) 駅に着いたって、誰が？

縁 なに読んでんのよ。(忍を蹴り飛ばす。忍、失神)

百子 忍兄い。(忍を揺する)

真琴 ああもう騒々しい。誰か来るんでしょ、お姉ちゃん。

縁 えっ。

真琴

だってさつきから、そわそわしてるし。

縁

そんなことないわよ。あ、もうこんな時間？ 大変大変、早くお米呼びに行つて、お母さん研がなくちゃ。

真琴

ほら。

太一郎

誰。姉ちゃんの友達？

縁

いや、だから別に誰も。

百子

(縁に小声で)言っちゃえば？

縁

なに言ってるの。そんなこと……

百子

どうせいつか知られるんだし。いっそ今ここで。

真琴

なにコソコソ話してるの。

忍

百子は知ってるのか。

百子

ええと。(縁を促す)ほら。

太一郎

モモは知ってて、俺には内緒？

縁

別にそんなわけじゃ。

太一郎

なんか最近、素っ気ないよな、姉ちゃん。何で。俺のせい？

縁

そんなことないじゃない。

太一郎

だって前はまず俺に相談してくれただろ。どうして。俺が一人で牛乳飲んじやうから？

忍

わかってんなら少しは残しとけよ。もう充分育ってるんだからさ。

太一郎

うるさい。お前だってパック開けられないだろ、ちゃんと。この菱形がちゃんと菱形になってないよ。ボロボロになってて。こ

忍

だからなんだ。最後にパック洗って切って開いてんの、いっつも俺じゃないか。

真琴

ちよっとちよっと近所に聞こえるから。(縁に)で、結局、誰が来るの？

兄弟姉妹、縁に注目する。百子、縁に頷いて見せる。

縁

あの……言おうと思ってたんだけど……今日、実は……

電話が鳴る。反応する太一郎、忍、縁、縁、慌てて電話を取る。

縁

はい、御殿場です。あ、いつもお世話になってます。ちよっとお待ち下さい。太一郎、丸紅さん。

真琴 (忍に) 残念。

忍 (太一郎に) 出るよ。

太一郎、電話に出るのを躊躇う。

縁 ほら、早く。

真琴 やっぱり、~~メ~~切過ぎてるんだ。

百子 平気でしょ、ちよっとくらい。

忍 ちよっとじゃないだろ。

太一郎 半月、くらい。

百子 え。

真琴 そんなに？

縁 もう、いいから早く出て。

太一郎、渋々と電話に出る。

太一郎 すみませんっ。はい、わかっています、はい…

縁 すごく暗い声してた、丸紅さん。

百子 危ないんでしょ、あの出版社も。

真琴 小さいしね。

忍 姉ちゃんとは？

縁 危ないまんまよ。たぶんずっと。

真琴 来るのって、会社の友達？

縁 ー、そうねえ…

真琴 珍しいね、初めてなんじゃない？

縁 いや、あのね…
 太一郎 ちよっと待って下さいよ。いきなりそんな、無茶ですよ。そりゃ
 僕が悪いんですけど、だからって。あと三日、三日待って下さい
 い。ああもう、丸紅さん。丸紅さん。丸紅さん。あつ。(電話を切られた)

太一郎、力なく受話器を置く。

百子 どうしたの。

太一郎、いきなり居間の中をグルグル歩き回り始める。

縁 ちよつとちよつと、どうしたの。

太一郎 あいつ、福耳ぶりやがって。

忍 何なんだよ、ウロウロすんなよ。

太一郎 お前ら、そんな顔していられるのは今の内だぞ。すぐはこの家には血の雨が降るぞ。ああ降りまくるぞ。そりやもうどしや降りだぞ。

百子 誰の？誰の血の雨？

太一郎 俺。

四人 あ、なんだ。

太一郎 ホツとするなよ。心配しろ。俺の。頼む。してくれ。

縁 一体どうしたの？

太一郎 丸紅のやつ、原稿回収のプロを雇いやがった。

忍 原稿回収？

百子 なんなの？

太一郎 たとえ一ページも書けていない原稿でも、あらゆる手段で作家を追い詰め、必ず完成させて奪って行く、特別な訓練を受けたエキスパート。そいつらが通った後にはただ、ボロ布のようになった作家の骸が累々と地平線まで続いているという。

縁 まさか、そんな人が家へ？

太一郎 (頷いて) しかもよりによって新進気鋭の凄腕と噂される、三角倒立の蝮田。

四人 おおお。(恐がりかけて怪訝な顔)

真琴 って、どう恐いの？

太一郎 わからない。よくわからないから恐いんだ。

百子 会ったことは？

太一郎 ある、一瞬だけ。ああ、あの時もっと下手に出ておけば良かったかなあ。どうせまたプロみたいな顔して来たんだろ。

太一郎 プロなんだよ、俺は。

忍 プロ？家に金も入れない、身の回りのことは母さんと姉ちゃんに任せつきり、おまけに仕事の一切も守れない、それでよくプロだなんて言えるよな。

太一郎 ……

気まずい沈黙。

やがて忍、居間から立ち去ろうとする。

縁　　すぐお昼にするけど。

忍　　着替えてくる。

忍、居間から出て行く。

真琴　（沈黙を破って）失恋と就職活動で気が立ってるんじゃない？

百子　マリちゃんもマリちゃんだよ、そんな電話してきて。

真琴　言わなきゃよかったかな。

縁　　諦めがつくんじやない、そんな無神経な女。（太一郎を伺って）早くお昼にしなきゃね。その、何とかママシが来るんなら。

押し黙ったままの太一郎、牛乳を飲み干そうとするが気が乗らない。途中で手を止め、当たり前のように残りを牛乳パックへ戻す。

縁　　ちよつと、これ、あんただけのもんじゃないのよ。

太一郎　（聞いてない）あれ、やっぱり忍だったのかなあ。

縁・真琴・百子　？

太一郎　あ、いやその、先月かな。出版社のパーティがあつて、二次会で編集長にクラブに連れてかれたんだけど。そこであいつによく似たやつを見掛けてたんだ。

真琴　クラブってどこの？

太一郎　クラブ『超合金』。

真琴　『超合金』って六本木の？

縁　　まさか、忍がそんなところ。

百子　合コンかもしれない。

四人　……

真琴　話し掛けなかったの？

太一郎　暗くてハッキリわかんなかったし。そこにあいつ、蝮田が来たんだよ、二次会から飛び入りなんて言つて。

百子　これから来る？

太一郎　そう。そいつ避けるのに気を取られてたから。それに忍だったとしても、ちよつと話し掛けらんなかったなあ。

縁　　なに？

太一郎　親父と母さんに内緒な。頭悪そうな女と絡まってさ。（落ちている縁の服を拾って絡みつける）もうこんなかんじで、いや、

もつとすごかったか。もうこんなかんじで。こうなって。こんななって……

縁 百子、見ちゃ駄目。(と言いつつ動揺している)

真琴 まあ、あんなんでも男だからね、一応。

太一郎 フラれた腹いせだったのか。

縁 忍かどうか、わかんないでしょ。

百子 そうだよ、違う人じゃない？

真琴 まあどっちにしても、マリちゃんどこに殴りこむよりかは。ねえ？

太一郎 やるかもしれないぞ。運のないやつは他人の幸せを人一倍、恨めしく思うもんだろ。ま、しばらく家じゃ、マリちゃんの名前はタブーだな。

縁 そうね、あの子を刺激しないようにしましょう。

真琴 そうしとくか。じゃ、それから幸せキーワードもタブーだね。デートとか、婚約とか、結婚とか、そういうのは家じゃしばらくタブー。ね。

縁・百子 ……

真琴 ね。

縁・百子 ……

メール着信音。
縁と百子、固まったまま動けない。

太一郎 なんか鳴ったけど。

縁 お隣の風鈴じゃない？

百子 そうそう、そうそう。

真琴 メールだよ。友達じゃないの？

百子 あっそうだ、真琴姉え。トイレ、いいの、トイレ。

真琴 ああっ。(立ち上がって少し辛そうに) 危なかった、もう少しで歩けなくなるとこだった……

真琴、論文を持って小走りで居間から出て行く。

百子 お兄ちゃんも早く原稿書かないと。来るんでしょ、何とかママシが。

太一郎 もういいよ。

百子 いいって……

太一郎 忍の言うこともちよつとは合ってる。ここらが潮時かもな。ほ
ら、俺、一応、教員免許持ってるだろ、どこかの臨時教員に
もなってるさ……

百子 ばっかっ。(太一郎の頬を叩く)

縁 百子。

太一郎 何するんだよ。

百子 そんなお兄ちゃん、お兄ちゃんじゃない。あたし、知ってるん
だよ、お兄ちゃんが原稿を書き溜めていること。

縁 えっ、そうなの？

太一郎 いや、あれは……

百子 納得いかないから押し入れに入れっぱなしなんでしょ。でもあ
たし、コッソリ読んじゃったの。面白かったよ、お兄ちゃん。

太一郎 (照れて) 勝手に読むな。

百子 受験勉強のストレスなんて一気に吹き飛んだよ。ザッシーも夢
中になって読んでた。

太一郎 (適当なところを指差し、照れて) 勝手に読むな。

百子 こんなすごいミステリー書いたのが自分の兄だなんて、あたし
初めて自分にすごく誇りが持てた。だからお兄ちゃん、いつも
のお兄ちゃんに戻ってよ。

太一郎 しまい込んだやつを引っ張り出してみるか。

太一郎、牛乳パックを持って居間を出て行く。
縁、百子の言葉をメモしている。

百子 (何事もなかったかのように) さ、メール見よ。

縁 本当に小悪魔よね。

百子 (メールを読んで) あっ。

縁 なに。(読んで) 新製品ニュース……

百子 DM。あーあ、お兄ちゃん叩いて損したあ。

縁 悪魔!

百子 いいじゃん、あれでやる気になったんだし。

縁 ……ねえ。

百子 ん？

縁 本当に面白いの？あの子のミステリー。

百子 さあ。

縁 さあ、つて。

百子 読んだことないし。

縁 読んでないの？

百子 読まないよ。頭悪くなりそうじゃん。

縁 じゃあ、押し入れに原稿を溜めてるっていうのは。

百子 あ、それは本当。前にチラッと見たんだ。

縁 それ、もしかして、盗んできたやつ？

百子 は？

縁 ほら、あの子が高校の時、ドンキーから盗んだやつ？

百子 は？何のこと？ドンキーってなに？

縁 文芸部の先輩の。ミステリー書くと、いつも凶器が鈍器で。だからドンキーって：・

百子 人の名前？

縁 ああ、そうか、あんた小さかったから知らないんだ。そうか、そうか：・

百子 なになに？お兄ちゃん？高校の時？

縁 聞く？

百子 なになに？

縁 (怖い笑顔で) 桃色ゴーストライター事件。

百子 :・誰か死んだの？

縁 死なないわよ。ああ、あの子の初恋は死んだけど。

百子 初恋？

縁 そう、サオリさん。交換日記してたの、太一郎。

百子 :・ごめん、今、急に日本語の意味がわからなくなった。

縁 交換日記。してたの、そのサオリさんと。太一郎がね。で、邪魔したのがドンキー。桃色ゴーストライター。で、死んだの。

百子 全然わかんない。ええと、お兄ちゃんが、恋？

縁 そう、そう。

百子 あのお兄ちゃんが？

縁 あんなんで照れ屋だから、あの子。日記の受け渡しをそのドンキーに頼んだのよ。だから、その日記、途中から彼女の振りを
して、実はドンキーが書いてたのよ。

百子

ええっ。

縁

彼もサオリさんが好きだったんでしょ。三角関係。

百子

え、じゃ、そのドンキーが勝手に？サオリさんに頼まれたとかじゃなくて？

縁

勝手にゴーストライターね。

百子

うわあ、ちよつとその人、なんていうか：

縁

わかるわよね、そういう気持ち。よくやったけど。あたしも。

百子

は？

縁

半年、騙し続けるって難しいわよね。

百子

半年？：お兄ちゃん、信じてたんだ。

縁

ばれた時は大変だったのよ。帰って来たらいきなり泣いて泣いて。で、「悔しいからドンキーのワープロから作品盗んできてやった」って。

百子

盗む、って。

縁

フロッピーに何枚分もあったんで、彼が三年間書き溜めた作品。それをまるごと全部持って来ちゃったの。黙って。

百子

お兄ちゃんが。

縁

やる時はやるでしょ、あの子も。

百子

それって、まずいんじゃないの？

縁

でしよう？だから早く始末しなさいって言ったの。それがまだ仕舞い込んであるのかと思って。

百子

押し入れ？ううん、フロッピーとかはなかった気がする。

縁

そう、ならいいんだけど：

メール着信音。
パソコンにしがみつく二人。

百子

相良さん。

縁

どこ、今、どこなの？

百子

うわ、もうバスに乗るって。どうする、来ちゃうよ。

縁

ええっ、どうしよう、どうしよう、どうしよう。

百子

って、あれ、どうやってメールしてるの、相良さん。(メールをよく見て)携帯か。何だ、思ったよか普通の人かも。ポストペットとか、携帯とか。

縁

当たり前じゃない、あたしの条件にピッタリの人なんだから。

百子　それが不安なんだよね。ねえ、うちの住所知ってるの？
縁　うん、知ってるはず。

百子　じゃ本当に来ちゃうんだ。相良さんって格好いい？

縁　写真はまだ。年収もはっきりとは知らないのよ。

百子　それはいいんだけど。仕事はなに？

縁　保父。

百子　保父？

縁　保育園の、保父さん。

百子　子供好きなんだ。いいかも。

縁　そう思う？

百子　写真あるといいのに。

縁　まだサービスの方に、ちゃんとお付き合いしますって報告してないから。

百子　とか言って、もう決めてるくせに、ユカリン。

縁　きやあきやあきやあ。

身悶えしながら縁、ヒマワリのタネ袋を祖父部屋へ投げ込む。

百子　そうだ、お姉ちゃん、バス停で待ち伏せしなよ。相良さんが家に来ないように。

縁　そうね、それがいいわね。あ、でも何とかママシが。

百子　平気だって、真琴姉もいるし、お母さんも帰ってくるよ。

縁　そう？じゃ・・・(出て行こうとする)

百子　(掴まえて) 待って。その格好はまずい、かなりまずい。

縁　あ、そうよね、手ぶらじゃね、バッグ、バッグ。

百子　ええと、あたしのバッグ貸してあげる、この前買ったやつ。

縁　いいの？

百子　それからバッグに合った服も。そうだ、そうしよう。早く部屋に来て。

縁　これ、脱がなきゃいけないの？

縁と百子、居間から出て行く。
入れ違いに真琴、トイレから手ぶらで戻って来る。
玄関の音。
真琴、居間から顔を出し、

真琴 もう、お母さん遅いよ……あつ、すみません。どうぞ上がってください。

蝮田（声） あの、こちら御殿場さんの……

真琴（声） そうです。あ、表札見えにくくてごめんなさい。どうぞこちらへ。

蝮田（声） あいたつ。

真琴（声） あ、その角、出てるんです。大丈夫ですか。

蝮田（声） 今ですね、そこで眼鏡をなくしてしまつて……

真琴 え、眼鏡ですか。

蝮田、居間へ入って来る。
（真琴は彼女を縁の友人だと誤解している）

蝮田 門のところでは何だかこう、ヒュツて音がしたと思つたら、すごく鋭い感じの物が飛び掛つてきて驚いて。それで眼鏡がお庭の方に……

真琴 あ、そうですか。（小声で）バカ兄貴。

蝮田 は？

真琴 じゃ、探してみます。枝が風で飛んで来たんですかね、うちの庭って植木が多いんで。

蝮田 ああ、ヒマワリも素敵ですね。

真琴 あれ、姉が小学生の時に学校からもらつて来て、それから年々ずつと。どうぞ。（座布団を勧める）

蝮田 どうも。（座る）

真琴 意外とママなどところはママなんです、あれでも。会社だと、よくミスして迷惑掛けてるみたいですけど。

蝮田 はあ。

真琴 今、片付けますから。（テーブルの資料を片付ける）

蝮田 遅くなりましたけど、私。（名刺を出そうとする）

真琴 いいですよ。次女の真琴です、いつもお世話になってます。

蝮田 いいえ、そんな。伺うのは初めてですから。

真琴 （奥に向かつて）お姉ちゃん。何してるんだろ。

蝮田 あ、お構いなく。

真琴 呼んで来ますね。

蝮田　いいですから。ゆっくりしていくつもりはないので。
真琴　そんな、ゆっくりしていった下さい。じゃ、麦茶を。
蝮田　あの、本当に時間がないので……

真琴、台所へ行き、麦茶を用意する。
蝮田、こっそりと三角倒立の練習。前屈みになっている蝮田の後ろを、着替えた忍、怪訝そうに眺めながら台所へ。

蝮田　眼鏡ないと距離感が……

蝮田、バッグから携帯電話を取り出してかける。

忍　誰。

真琴　お姉ちゃんの友達。

忍　何か変な格好してたよ、こう、前屈みで。

忍、冷蔵庫を開けて中をあさる。

真琴　え、お腹痛いのかな。

蝮田　（電話中）ああ、もしもし、私。蝮田です。

忍　（「蝮田です」に被さるように）あーっ、俺のパンナコッタがない。誰だよ、もう。

蝮田　（電話中）予定通り五時までにはそちらへ。ええ、大丈夫です。一、二時間あればきつと。ええ……

忍　（居間を覗いて）休日なのにスーツだよ、あの人。

真琴　営業なんじゃない？休日返上ってやつ。

忍　営業だとそういうのもあるのか。

真琴　どういふところ回ってるの、あんた。

忍　言ったってわかんないだろ、真琴には。

真琴　お姉さん。

忍　……

蝮田　（電話中）はいわかりました。ああそれから、そこにいるかしら、丸紅さん。

忍　（「丸紅さん」に被さるように）あーっ、俺が洗った牛乳パックは？

真琴　縁側に並んでたけど。お母さん、干したんじゃない？

忍 そう。

蝮田 (電話中) ああそう、ちよつと話があるので掛け直してくれるように伝えてもらえますか？ええ、それじゃ。(切る)

真琴 ねえ、どうしても今年決めたいの？

忍 なにが？

真琴 なについて、就職。

忍 そりゃあ。

真琴 無理しなくてもさ、また来年頑張ったっていいんじゃない？ほら、あんた国立だし、頼めばお父さん、あと一年くらい払ってくれるよ。

忍 百子がいるだろ。次も駄目かもしれない、あいつ。

真琴 えっ、どうして。

忍 うちで浪人したのってあいつだけだから、それ気にしててさ。

真琴 一浪なんて普通でしょ。

忍 親父はそう思っていないから。真琴なんてサクッと大学院まで進んじゃうし、兄貴、あんなんでも教免持つてるし。

真琴 高校の成績は悪くなかったのに。

忍 行きたいところに行かせてやればいいんだよ。少しくらい授業料高くたって、末っ子なんだし。大体、兄貴がまともな稼いでれば百子の授業料くらい：親父、再来年、定年だし、縁姉えちやんとこだって危ないんだらう？

真琴 羽振りのいい人でも掴まえてくれればねえ。

忍 あんなに男の気配なくていいのかなあ。

真琴 お姉ちゃん結婚させるんなら、あの会社立て直す方が早いよ。あつ、いけない、トイレに論文置きっぱなしだ。あんな、取って来てくれない？

忍 なんで。

真琴 バカ兄貴が流しちゃうかも。お願い。

真琴、麦茶を持って居間へ。
忍、居間から出る時に落ちているロープに気づく。拾う際にカレンダーについた○に気づく。(縁が付けた○) 忍、居間を出て行く。

真琴 どうぞ。

蝮田 あ、どうもすみません。

真琴 大変ですね、休日なのに。

蝮田 仕事ですから。

真琴 (奥を向いて) 何してるんだろ。

蝮田 でしたら、私がお部屋の方に。(腰を浮かす)

百子、居間へ走りこんで来る。

百子 真琴姉え、ちよつと手伝って、お姉ちゃんが：

百子、蝮田に気づいて固まる。蝮田、会釈する。

真琴 お姉ちゃん、何処にいるのよ。待ってるのに。

蝮田 ですからもうお構いなく。私の方から部屋に。

真琴 いいんですよ。呼んで来て、お姉ちゃん。

蝮田 お姉さんより、お兄さんを：

真琴 えっ？

百子、状況を理解し、いきなり走って出て行く。

真琴 百子。ごめんなさい、子供っぽくて。

蝮田 人見知り？

真琴 呼んで来ます、座って下さい。

真琴、居間から出て行く。蝮田、後を追おうとするが携帯が鳴る。

蝮田 ああ丸紅さん。さっき着いたところ。何だか意外と歓迎ムード

みたい。いえ、まだなの。部屋に籠ってるみたいね。出て来ないのよ。私、彼には前に一度しか会ったことなくて。そう、二次会。あそこ、暗かったし。どんな感じの人だったか、よく覚えてなくて。え、ヒョロツとして、結構ハツキリした顔、一見強気、でも実は弱腰。それは助かるわね。ええっ、牛乳が好きなの？

忍、真琴の論文と牛乳パック(干してあった)を抱えて入って来る。

忍と蝮田、目が合う。
蝮田、しばし論文の束と牛乳、そして忍を凝視。
やがて蝮田、勢いよく電話を切る。
(蝮田、忍を太一郎と勘違いしている)

蝮田 (笑顔で) どうも。

忍 どうも。

蝮田 (論文を示し) それ、早速、見せていただけ？

忍 これ？いや、これは俺のじゃないんで。

蝮田 俺の作品とは言えないレベルってこと？生意気、言うのね。でも嫌いじゃないわよ、生意気な男は。

忍 え、何言ってるんですか？

蝮田 もしかして、私のこと、覚えていない？

忍 ええ？

蝮田 やっぱりそうなんだ。淋しいわ。

忍 どこかで会いましたっけ？

蝮田 つれないな。まだ先月なのに。

忍 先月。

蝮田 クラブ『超合金』。

忍 『超合金』：：

蝮田 どう、思い出した？まあ、あそこ暗かったし。あなただいたいぶ酔ってたみたいだし。正直な話、私もあなたの印象、違ってた。もつとヒョロ長く見えたんだけど、意外と華奢だったんだ。

忍 あの時は靴が。

蝮田 靴。

忍 いや、何でも。なんでうちに？姉ちゃんとは前から知り合い？

蝮田 お姉さんって？

忍 え、姉ちゃんに会いに来たんじゃないの？

蝮田 なぜ。あなたに会いに来たに決まってるでしょう。

忍 俺？なんで？

蝮田 面白い面白い。しらばっくれるんじゃないわよ。

忍 ええっ。

蝮田 女だと思って甘く見ると血の雨が降るわよ。

忍 何言ってるの、何のことだか、さっぱり。

蝮田 そう。じゃあ言ってるあげる。はっきり、言ってるあげるわ。

忍 ああ。

蝮田 遅れています。

忍 へ？

蝮田 はっきり言います、遅れています、三週間。

忍
：
：

蝮田 三週間、遅れているんです！

忍・蝮田
：
：

忍 それって、なにが。

蝮田 なにが？自分の胸に手え当てて考えてみなさいよ。

忍の手から論文と牛乳パックがこぼれ落ちる。

忍 それってどうなの？三週間遅れるとどうなの？三週間ってもう決定的なの？

蝮田 決定的っていうか、もう致命的。

忍 致命的。そんな、だって絶対に俺のせいだとは言いきれないだろう？

蝮田 ああ、責任逃れ？

忍 そんなじゃないけど、いきなり、そんなこと言われたって。

蝮田 いきなり？いきなりって言うの、あなた。大人なら、こうなることぐらい予想しておいたらどう？

忍 そう言うあんたにだって、責任の半分はあるだろう？

蝮田 もっと早く来れば何とかなってたかもしれないってこと？冗談じゃないわ、自分のこと棚に上げて。まがりなりにも男なら、自分のやったことの後始末くらい、きっちり責任とってみたらどう？

忍、へなへなと座り込む。蝮田、忍に掌を差し出す。

蝮田 覚悟はできた？

忍 なに？

蝮田 いただくべきものは、いただかないとね。

忍 そういうことか。

蝮田 いただくまで帰るつもりはないから。

忍 ないよ。

蝮田 ない、じゃ困るの。

忍 ないものはないんだ。

蝮田 じゃあ何とかしなさいよ、今すぐ。座り込んでないで。

忍 どうしろって言うんだよ。

蝮田 今までこう、溜めたりとかしてないの？

忍 ないよ、全然。だいたい、俺まだ学生だし。

蝮田 え、卒業してなかったの。

忍 ああ、あれは嘘だよ、美容師やってるなんて。

蝮田 いえ、始めからそうは思っただけ。

忍 やっぱり。そうか、見えないか、厚底履いてもダメか。

蝮田 何言ってるの。ああ、こんな無駄話してるヒマないの。今すぐ何とかして。してくれないと：・

蝮田、三角倒立をしようとしてうづくまる。
忍、慌てて蝮田を抱き起こす。

忍 ばか、何してんだ、無茶するな。洗面所ならあつちだから。廊下の突き当たり。変な仕掛けとかあるかもしれないけど。

蝮田 洗面所？

忍 駆け込んでいいから。駆け込むもんだろ、普通。

蝮田 別に今、行きたくは：・

忍 無理するのはやめてくれ、頼むから。何かあっても、俺、責任とれないから。

蝮田 ：・確かに、休日出勤、続いたのよね。そんなに調子悪そう？顔色、悪く見える？

忍 いや、どうだろ。

蝮田 ここ二ヶ月、休みがなかったから。

忍 忙しいんだな。看護婦って。

蝮田 は？からかわないで。

忍 え、違うの？

蝮田 なに言ってるの。

忍 じゃ、何、OL？

蝮田 あの時言わなかった？先々月からフリーになったの。

忍 フリーター？

蝮田 もう組織には頼らないことにしたの。あんな頭の古い爺いどもには付き合っただけから。で、コネを頼りにくる仕事くる仕事、片っ端から受けて、で、二ヶ月働きすぎめ。

忍 大変なんだ、フリーター。

蝮田 大変ね。思ったより。会社勤めの方が意味、気楽。だけど

私は今の方が楽しいからいいの。休みは当分取れないでしょうけど。

忍 顔色、よくないかも。

蝮田 じゃ、ちよつとお借りするわ。

蝮田、居間から出てトイレへ行く。
忍、落ちた論文や牛乳パックを拾っている、
入れ違いに縁と百子、居間へ入って来る。(縁は着替えている)

百子 あれ、いない。

縁 忍、ここにいた人は？

忍 トイレ。あつ、姉さんの友達じゃないよ。

縁 そう、そうなのよ。

百子 気づいた？

忍 うん、まあ。

縁 今日、私の友達が来るって言ったけど……

忍 ああ大丈夫。すぐに帰るから、あの人。心配しないで。

縁 は？

百子 あの人、誰か、わかってる？

忍 ちよつと言えない。悪いけど、少し二人で話させてくれないかな。

縁・百子 はあ？

太一郎、パンナコッタを食べながら居間へ入って来る。

太一郎 あ、姉ちゃん。何でもいいから何か作って。腹減って集中力が

さ。モモ、お陰でいい作品、掘り出したよ。自分で忘れてたけど面白いやつが押し入れに……

忍 兄貴。

太一郎 何だ、お前もいたのか。

忍 ちよつと、いいかな。

太一郎 何だよ、だから今、原稿をでっち上げなきゃいけないんだつて……

忍 ……

太一郎 どうした？

忍 (口を開こうとし、縁と百子を伺う)

縁 なに？

忍 男同士で話していい？

百子 ええっ。

太一郎 じゃ、爺ちゃんここで話すか。

忍 いや、できれば二人だけで。

太一郎 気持ち悪いな。平気だよ、爺ちゃん、耳遠いからの襖を開けて）ちよつと入るよ。ああいよいよ、テレビ見てて…

太一郎と忍、祖父の部屋へ入って行く。

縁 どうなってんの。

百子 わかんない。

縁と百子、襖に耳を当て、中の様子を伺う。忍、襖を開けると縁と百子を睨み、再び襖を閉める。すぐにテレビの音、大きくなる。

縁 （大声で）どうなったの？

百子 （大声で）ママシは？

真琴、居間へ入って来る。

真琴 （大声で）何、この音。お姉ちゃん、何処にいたの。さっきからずっと友達が。

縁 （大声で）あれは友達じゃないの。

真琴 （大声で）友達じゃない？

縁 （大声で）友達なんかじゃないの。

真琴 （大声で）ケンカしたの？

縁 （大声で）そうじゃない。最初から友達じゃないの。

真琴 （大声で）最初から友達なんていない？

縁 （大声で）いるわよ、友達くらい。

百子 （大声で）そうじゃないでしょ。

縁 （大声で）そうじゃなくないわよ。いるわよ、友達。

百子 （大声で）そういうことじゃなくて。あの人は、縁姉えの友達じゃなくて。

真琴 （大声で）ええっ違うの？じゃあ誰なの？

百子 (大声で) だから、あの人はお兄ちゃんの：

百子の台詞を遮って、蝮田、居間へ入って来る。

蝮田 (大声で) すごい音。何ですか、トイレのドア、ベタベタ。何かのワナれってトリモチじゃないの。うわ、ベッタベタ。何かのワナですか？

真琴 (大声で) ごめんなさい。

百子 (大声で) こっちで洗って下さい。

百子、蝮田を台所へ連れて行く。
蝮田、流しで手を洗い始める。

縁 (大声で) だから、あの人は：

真琴 (大声で) ああもう、うるさいなあ。

真琴、祖父の部屋へ入って行く。
テレビの音、すぐに消える。
百子、台所から戻って来る。

縁 どうなってるの、何がどうなってるの、一体、私に友達はあるの？

百子 落ち着いて！(縁を叩く) あたしが何とかするから、お姉ちゃん、バス停に行つて、早く。

縁 だけど。

百子 早く。ここに相良さん来たら、あたしもう何が何だかわかんなくなる。絶対、家に連れて来ちゃダメだよ。

縁 わかった。頼んだわよ。

百子 うん。

縁、居間から走り出ていく。
祖父の部屋から神妙な顔をした太一郎・真琴・忍が出て来る。
無言で考え込んでいる三人。

百子 なに？

真琴 いいの、百子は。

太一郎 部屋行つてろ。

忍 俺：

太一郎 いいよ、黙つてろ。今、考えるから。

真琴 どうする、父さんと母さん。話した方がいいよね？

太一郎 だけど、もう来てるんだろ、その女。

真琴 台所。ほら、あの人。

太一郎 そんな女、見たくもない。(顔を背ける)

忍 やっぱり俺、何とかするから。

真琴 何とかってどうするのよ、どうかできるの。

太一郎 金か。

真琴 あるわけないでしょ、家に。お金なんて。

百子 ねえ。

太一郎 お前、貯金は？

真琴 少しなら。兄貴は？

太一郎 (ポケットをまさぐる)

真琴 いい。いい。

百子 ねえ。

太一郎 部屋行ってる。

百子 どうかしたの。

真琴 金目の物とか。

太一郎 金目の物か。

百子 (忍に) ねえってば。

真琴 百子。

忍 マリちゃんって本当に鋭いのかも。

百子 え？

忍 予知夢ってあるんだなあ。

太一郎 よし、待ってる。

忍 兄貴。

太一郎、居間から出て行く。
出て行った瞬間、蝮田、台所から顔を出す。

蝮田 石鹸小さくて泡立たないんだけど。大きいのない？

真琴 ない！

百子 あの、流しの下にきつと。

蝮田 下？

蝮田、再び台所へ戻る。

真琴 あんな女、放つときな。

百子 え、だけど。

真琴 ああもう塩まきたい気分だわ。

百子 だから一体なにがどうしたの？

真琴 なにが？あんたのザッシーに聞いたらどう？だいたい、何してんの、ザッシーは。こういうことが起きるのはザッシーにはわからないわけ？

百子 なに言ってるの。

真琴 大事なことに全然、役に立たないじゃない。あんたの受験だつて、そう。どこも受からなかったじゃない。

百子 そんなの関係ないでしょ。

真琴 関係なくないわよ、そんなの本当にいるの？なんで？この家、建売よ。まだ十年。何でそんなのがあるのよ？

百子 見えないからってひどいよ。どうするの、聞いてたら……

真琴 聞けっつーのよ。何処にいるの。ここ？ここ？

真琴、床の上をあちこち踏みつける。

百子 やめて。

真琴 ここか。ここか。

百子 やめてって言ってるでしょ！

百子、真琴につかみかかる。

真琴 何よ、やる気？

百子 ばっかみたい。

真琴 なにが。
ちよつと頭いいからっていい気になって。馬鹿じゃない。

真琴 馬鹿はあんたでしょうが。

百子 はい、そうです、馬鹿ですー。

真琴 わかってんなら勉強してよ。最近、予備校さぼってるでしょ。知ってるんだからね。

百子 夏休みなんです！。

真琴 どこに夏休み予備校があるのよ。あれだって安金じゃないんだからね。

百子 真琴姉えが払ってるわけじゃないでしょ。

真琴 あんたが浪人したから、あたし奨学金とったのよ、頑張ってるよ。

百子 ご苦労様です！。

真琴 あんた、いい加減にしないと……

忍 やめろよ。俺のことでケンカなんてしないでくれよ！

メール着信音。

百子、隅へ行ってパソコンを覗き込む。

忍、真琴にカレンダーを指し示す。
(日付けには縁の付けた丸がたくさん付いている)

忍 見ろよ。

真琴 なにこれ。

忍 模擬テスト。百子の。

真琴 え、こんなに。

忍 俺も驚いた。

真琴 ほとんど毎日じゃない。

忍 頑張ってるんだよ、あいつなりに。

真琴 こんな、体壊しちゃうよ。

忍 何かしてなきや落ち着かないんだろ。あるだろ、そういうこと。いろいろ悩んでるんだよ。悩まないはずがないだろう。

百子 (相良のメールを読んで) あああ、迷ってるう。

忍 迷え、お前はもっと迷っていい。

百子 (メールを読んで) 何処ですれ違っちゃったのかなあ。

真琴 そんなつもりは……

忍 いや、人生すれ違いだ、何もかも。

百子 (メールを読んで) もう、何でこう、うまくいかないのお。

忍 まったくだ。まったく、お前の言う通りだ。

真琴 百子。

百子 え？

真琴 言い過ぎたよ、ごめん。

百子 ……

太一郎（声） 忍。

原稿の入った封筒を手にした太一郎、居間へ入って来る。

太一郎 家で金になりそうなのは、これくらいだ。

真琴 これ、原稿。

忍 駄目だ、これ、渡さなきゃいけないんだろう？これから来る、何とかマムシに…

太一郎 いいんだ、ほら。

忍 だけど。

太一郎 こんなの一つや二つ、書き溜めてあるに決まってるだろう。

忍 ……

太一郎 何処か、出版社に持ち込めば、ちよつとは金になるだろう。

蝮田が台所から出て来る直前、
電話が鳴る。
真琴、出ようとする。

太一郎 真琴。たぶん、俺だ。

太一郎、蝮田に背を向ける格好で電話を取る。

太一郎 （電話中）あ、親父。

蝮田、居間へ出て来る。

蝮田 もう手がガビガビ。ハンドクリームとかない？

真琴 ない！

百子 オロナインでいいですか。

蝮田、忍が手にした封筒をじっと見つめている。
忍、ゆっくりと封筒を差し出す。

忍 家で金になりそうなのはこれだけだ。

蝮田 これ。

忍 これを出版社に。

蝮田 (手早く封筒の中を覗いて) 驚いた。

忍 乱暴にするな。

蝮田 ああごめん。なんだ、ちょっと見直した。

忍 何が。

蝮田 ちゃんと責任は取るんだ。

忍 もう行ってくれ。

蝮田 わかりました。またあとで連絡します。

忍 要らないよ、連絡なんて。

蝮田 聞きたくないの？これ(原稿)がどうだったか。

忍 いいから。行ってくれ。

蝮田 自信ありってこと。嫌いじゃないわ、そういうの。

忍 やめてくれ。あんたも、もっと自分大事にしなよ。俺が言えた義理じゃないけど。

蝮田 この仕事終わったら、休暇でも取るわ。

蝮田、居間から出て行く。
すぐに玄関が開いて、閉まる音。(蝮田が出て行った)
太一郎、電話を切る。

太一郎 親父、もう一泊するって。

忍 兄貴。

太一郎 契約まとまらなかったって。大変だよな。

忍 俺：・

太一郎 いいって。メシにしよう。あれ、姉ちゃんは。

百子 コ、コンビニ。

太一郎 そうか。

真琴 何か作ろうか、ね、たまには。

忍 俺、丸紅さんに電話する。

太一郎 いい。

忍 だってこのままじゃ。

真琴 あんたはいいの。大人しくしてな。電話はあたしがするから。

太一郎 いいって。

真琴 父さんと母さんにも話さないよ。

忍 うん。

真琴 あんた一人で話すとややこしくなるから、あたしを呼びな。

忍 真琴：・姉ちゃん。

真琴 やめてよ、くすぐったいじゃないの。

ゆっくりと玄関の開く音。

静まり返る四人。互いの顔を見交わす。

(太一郎・真琴・忍、蝮田が来たと思っっている)
(百子だけが相良だと思っっている)

真琴 マムシ？

百子 来ちゃったあ。

百子、慌てて見に行こうとする。

太一郎 いい。(玄関に向かって) 上がって下さい！

忍 兄貴。

太一郎 どうぞ、上がって下さい！

真琴・忍・百子、固唾を飲んで居間の入口を見つめる。

太一郎は入口に背を向け、緊張した面持ちで立っている。
やがて相良、ケーキの箱を手にし、地味なスーツ姿で入って来る。

百子 はああ。

忍 落ち着け。

百子 (独り言で) 普通だあー。

相良 ええと、こちら御殿場さんのお宅ですよね……って、上がっておいて何ですけど……

太一郎 え、男？(振り返る)

相良 表札が見当たらずで、表で戸惑ってしまった。

縁(声) 百子。百子いる？

百子 お姉ちゃん。

縁(声) ねえ、メール来てない？どこかで行き違いになったみたい。

縁、居間へ駆け込んで来る。
相良と鉢合わせる縁。
しばし相良を眺め、気づいてよろめく縁。

百子 お姉ちゃん。

真琴 (縁に) 気をつけて、ママシよ。

相良 (逃げ惑って) どこ。どこ。

忍 (縁に) 早くこっちへ。

真琴 (縁に) 離れて。血の雨が降ってくる。

相良 (逃げ惑って) どこから。どこから。

太一郎 (相良に近づいて) あの…

忍 (太一郎に) 下がって。

相良 はいっ。

真琴 (太一郎に) 無茶しないで。

相良 はいっ。

真琴、相良の前に進み出て、じっと彼を睨みつける。

百子 あの、ちょっと。

真琴 いいから。ここはあたしにまかせて。

忍 無理すんな。

太一郎 真琴。

真琴 たまには、あたしにも何かさせて。

太一郎 いや、あのな。

相良 僕も何かできることありますか？

真琴 さっきの兄貴、ちよつとだけ格好よかった。あたしにも一つくらい格好つけさせてよ。

太一郎 いや、それはいいんだけど。この人は…

真琴 (相良に) お願いします。

相良 はい、何をすれば…

真琴 このまま、今日は帰ってくれませんか。
縁 真琴。

真琴 (縁に) 大丈夫。(相良に) 何も聞かずに、今日のところは引き取りください。

縁、気を失う。

忍 姉ちゃん。(縁を抱えて揺さぶる)

百子 あのあのあのあの。

相良 (百子を制して) それは納得できません。

真琴 納得して下さい。

相良 できません。せっかくここまで来て、会った途端、そんなこと言われて。傷つきますよ、僕だって。

真琴 いいから帰って下さい。

相良 帰れません。

忍 そんなに俺たちを苦しめて楽しいか？

相良 ええっ、そんなに？

太一郎 待て。

真琴 下がってて。

太一郎 ちよっと待ってって。お前たちさ、問題はそういうことじゃない気がするんだよ。

百子 (救いを求めるように) お兄ちゃん。

太一郎 あんた。

相良 はい。

太一郎 ケーキは斜めに持つちゃ駄目でしょう。

へたり込む百子。

忍 百子。

相良 大丈夫です。ケーキじゃないので。マドレーヌです。

太一郎 マドレーヌ？

相良 僕が焼いたんですけど、今朝。(箱を開けて見せる)

太一郎 (覗いて) ほう。

忍 (へたり込んだままの百子に) どうした？

真琴 マムシのせい？
ちよっと牛乳入れすぎたみたいなんですけど。

太一郎 ほうほうほう。(マドレーヌをもらって食べる)

忍 気をつける、畏だ。

真琴 だめ。

太一郎

うまい。

真琴

何て姑息な手を。

忍

バクバク食ってるよ。

相良

良かった。変な形にしたので食べにくいかなって。

太一郎

うまい。

忍、立ち上がり、相良に向かって行く。

真琴

忍。

相良

ほら、丸いのばっかだどつままないでしょう……

忍

俺が行く。

相良

かと言って三角だと、ただのスポンジケーキみたいですし……

忍

ちよっと、あんた。

相良

だから、ほら、（忍に箱の中を見せて）前方後円墳。

忍、ゆっくりと失神。

真琴

忍。

太一郎

もう一個、いい？

相良

どうぞ。子供たちにも時々、焼いていくんですよ。

太一郎

はあ、子供？

相良

子供は反応が素直ですから。ちよっとまずいともう駄目で。（真琴に）どうですか、一つ。

真琴

その手にはのらないわよ。

相良

（笑って）いやだなあ、本当においしいですから。ね、食べて下さい。……縁さん。

真琴

（激しく動揺して）お姉ちゃんに間違えられた……

相良

えっ、縁さんじゃない？（縁と百子を見比べる）

祖父部屋からテレビの音が流れて来る。

太一郎

（祖父の部屋を見て）あ、テレビ飽きたのかな。いい？これ。（箱ごと受け取る）

相良

どうぞ。

太一郎

爺ちゃん、入るよー。

太一郎、部屋に入る。相良、縁と百子を見比べて悩んでいる。電話が鳴る。

相良 (考え込みながら) はい、相良です。いえいえ、はい……(切る)

相良、(縁だと思って) 百子に近寄ろうとする。

相良 縁さん。

縁、寝惚けながら相良の足を掴む。
百子、コンコンと相良に縁を指し示す。
相良、縁を抱き起こす。

相良 ユカリーナ？

縁 はい。

真琴と忍、怪訝そうに相良と縁を眺めている。

真琴・忍 あの……

縁 きゃあ。

縁と相良を隠すように百子、立ちはだかる。

百子 裏庭。行って。

縁 裏庭？

百子 ほら、花、見せれば。花。

縁 ああ。

相良 お花ですか。

百子 早く。

縁 ええ、はい、お花。

相良 へえ。どんな。

縁 私がヒマワリだった頃にもらってきた小学生。

相良 ええっ。

縁 満開なの。

相良 それはすごい。

百子、追いやるようにして二人を居間から出す。すぐに縁だけ戻って来ると、百子を部屋の隅に連れて行く。

縁 サービスにメールしといて。お付き合いOKって。

百子 ええっ。

縁 早く。今すぐ。三人にはバレないように。

百子 なんて。もういいじゃん。

縁 まだダメ。バレたら貸してる三千円、三万にするからね。

百子 そんな。

縁、居間を駆け出していく。それを見送る真琴・忍。
太一郎、祖父部屋から出て来る。

太一郎 あれ、姉ちゃんは？

百子 知らない。

百子、メールを書き始める。
電話が鳴る。

太一郎 (電話中)もしもし、あ、母さん：駄目だよ、間違い電話しちゃあ。誰だよ、相良って。姉ちゃん？何か忙しいみたい。じゃ。

太一郎、電話を切り、真琴と忍に向かって、

太一郎 (唐突に)で、あれは誰？

真琴・忍 ええっ。

真琴 誰って。

忍 マムシだろ、原稿取りに来た。

太一郎 はあ？違うよ、全然。

真琴・忍 ええっ。

太一郎 蝮田、女だし。

真琴・忍 ええっ。

忍 それじゃあ。

真琴 あの人は誰？

太一郎 何だ、お前ら、知らないのか。

忍・真琴、首を振る。

太一郎　じゃ俺は誰のマドレーヌを食ったんだよ。爺ちゃんも。

忍　もしかして、あれが友達とか？

真琴　お姉ちゃんのこと？まさか。

忍　まさかね。

真琴　あの会社、若い女とおっさんしかいないし。

太一郎　だろ。そんなことあるわけないだろう。(百子に)なあ。

百子　(メールを書くのに夢中)え、なに。

太一郎　何って、さっきの人。姉ちゃんの友達じゃないよなあ。

百子　んー。

真琴　百子。

百子　う、うん、知らない知らない。

忍　なんか、お前変だぞ。

百子　うそ。

真琴　なにか隠してる。

百子　隠してなんか。

太一郎　じゃ、さっきのは誰だ？

百子　知らない人。

忍　目を逸らすな。

太一郎　モモ、兄ちゃんには言えるよな。

百子　三万円くれるんなら、言う。

真琴・忍　百子。

太一郎　いつからそんな子になった。

百子　だって。だって。

太一郎　兄ちゃんは悲しい。

百子　だって三万とるって言ったら、絶対とるんだもん。

真琴　ねえ、それ。(パソコンを示す)お姉ちゃんのですよ。何であんなが覗いてんの？

百子　え。

忍　そーいや姉ちゃん、最近よくメールしてるよな。

太一郎 メール。そういや今日もずっと……

太一郎・真琴・忍、パソコンに駆け寄ろうとする。
百子、立ち塞がる。しばし、睨みあう四人。

百子 もしかして、みんなが騒いでるのって、さっきの男の人のこと？

真琴 何言ってるの。

忍 そうだよ。

太一郎 それしかないだろう。

百子 ああつ。じゃあ、みんなにも見えたんだ。

三人 はあ？

百子 なんだあ。何のことで騒いでるんだろって思った。何言ってるの、みんな、あれ、ザッシーじゃない。

三人 ええつ。

百子 よかった、みんなにも見えるようになったんだ。

真琴 ちよつと待ってよ。

忍 そうだよ、だってスーツ着てた。

太一郎 マドレーヌ焼いたって。

百子 そう、スーツ。ザッシー、時々はスーツだよ。

三人 ええつ。

百子 昨日、縁姉えも突然ザッシーが見えるようになったって。

太一郎 姉ちゃんが。

百子 そのお祝いにザッシーがお菓子焼いて。

真琴 嘘つくのもいい加減にして。大体そんなもん、いるわけないじゃない。

太一郎 待て。奴は牛乳を大目に入れたと言ってた。俺のためか。

忍 じゃあ、あの形にしたのも。

太一郎 お前を元気づけるためか。

真琴 そんなことあるはずないじゃない。

忍 前から百子にだけ見えるなんておかしいと思ってたんだ。

太一郎 俺たちに見えてもおかしくない。兄妹だしな。

真琴 見えてるほうがおかしいの。

太一郎 真琴、理系人間のお前には受け入れ難いかもしれない。が、お前が見たもの、それが真実だ。

真琴 あんなの、よれよれのスーツ着た、ただの地味な人じゃない。

太一郎・忍 おお。

忍 同じだ、やっぱり同じものが見えてる。

太一郎 間違いないな。ああ、あれがザツシー。

真琴 だから：

太一郎 どうして信じられないんだ。いいか、今までモモが嘘をついたことがあるか？

家の奥からドタドタと物音。(相良がトリックに掛かった音)

真琴 なに？

忍 この音。

太一郎 あっ。

百子 もしかして。

太一郎 裏庭に仕掛けたトリックが。

真琴 どうして裏庭に。

百子 密室でも何でもないじゃない。

忍 まさかザツシーが？

真琴 どんなの仕掛けたの。

太一郎 (考え込む)

百子 覚えててよ。

太一郎 どうせ引っ掛かるの、忍だけだと思ってたし。

忍 何だよそれ。

百子 相良さ：・サガ、サガサガ、サガさなきや、ザツシー。

百子、居間から出ようとする、縁と相良の音がする。

相良(声) あたっ、いだだだだ：

縁(声) 大丈夫ですか。

相良(声) あだだだだ：

相良、首にロープを巻きつけ、辛そうに入って来る。

相良 いたた：：小指、ぶつつけちゃいました。

縁 相良 ごめんなさい、玄関の角、出てるんです。削っておきます。ええと、きれいでした、ヒマワリ。いいんですか、タネ、こんなにもらっちゃって。

縁 はい、たくさんあるので。

相良 明日、子供たちにも配ります。喜ぶなあ、きっと。

縁 そんなことしたら、子供突き破ってヒマワリが生えちゃいますね。

相良 またそんな、可愛いこと言って。

真琴 (相良を見て) ビクともしてない。

忍 すごい。

太一郎 これは間違いないな。

相良 はい？

太一郎 本物だ。

相良 はい？

太一郎 真琴、上着を。

真琴 あ、うん。(ハンガーを取りに行く)

太一郎 忍、麦茶。

忍 うん。(麦茶を入れに台所へ)

太一郎 モモ、座布団だ。

百子 う、うん。

相良 どうぞお構いなく。

太一郎 いえいえ、そういうわけには。

相良、上着を脱ごうとしてロープに気づく。

相良 あれ、蜘蛛の巣かと思ってたらロープでした。どうりで苦しいはずだ。

縁 これ。

太一郎 申し訳ない。ケガはないですか。

相良 ケガ？なんでです？してませんよ。

真琴 すごいかも。

太一郎 姉ちゃんも、ほら座って。

縁 (百子に) ちよつと。

縁、百子を部屋の隅に連れて行く。

縁 しゃべったわね。

百子 ううん。

縁 だって変じゃない。

太一郎・真琴・忍・相良、正座をしている。

太一郎 ほら、姉ちゃん。

相良 (麦茶見せて) いただきます。

百子 お姉ちゃんが言うなって言うから。

縁 言うから？

百子 だから。

縁 だから？

百子 (笑顔で) ザツシ―って言つといた。

縁 は？

百子 相良さんのこと、ザツシ―ってことにしといたから。三千円、チャラね。

百子、座る。仕方なく、縁もそれに続く。

相良 うまい。やっぱり麦茶ですよね。いや、普段着馴れないものに着たので、暑くて暑くて。

太一郎 ああ、普段はこういう格好じゃなくて。

相良 ええ、もっと動きやすい格好で。子供相手ですから。

真琴 子供。

太一郎 今でも子供と遊ぶんですか。

相良 それが仕事みたいなものですから。

忍 仕事なんだ。

太一郎 で、やっぱり、一人増えてるとか言われるんですか。

相良 は？

縁 何でもないです。

相良 そんな、一人増えてたら大変ですよ。減ってるほうが大変ですけど。責任問題ですから。

忍 責任、あるんですか。

相良 当たり前じゃないですか。親御さんからお預かりしてる大事なお子さんですから。プロ意識をもってやらないと。

真琴 プロ。

太一郎 家を出る時ってどんな気持ちなんですか。

相良 は？

縁 失礼よ。

相良 すみません、質問の意味がちよっと。

太一郎 いえ、家を出る時っていうのは、どのへんで見切りをつけるものなんですか。何かキツカケとかあるんですかね。

相良 ああ、家を出たことがない？

太一郎 僕ですか？僕はないですけど。

相良 僕も。ずっと同じ家にいるんで。

真琴 ああ：・

忍 その前とか、別のところにいたとかは？

相良 ないですね。ずっと同じですね。

忍 そうなんですか。

真琴 知らなかったね。

太一郎 まさか、出て行く予定とか、ないですよね？

相良 ああ、縁さんですか。

太一郎・真琴・忍 ええっ。

相良 それを心配してるわけですか。なるほど。仲いいんですね。

縁 ええ、はあ。

相良 でもいきなりそんな。緊張するなあ。

真琴 出て行くって？

忍 縁姉ちゃん？

相良 やっぱ僕じゃ頼りないですか？

太一郎 あれは誤解です。人違いです。忘れて下さい。

相良 誤解。

太一郎 出て行かれたら困ります。

相良 よかった。

忍 僕の将来ってどうなんでしょう？

相良 はい？

百子 それより、縁姉えのこと。

縁 百子。
お姉ちゃんのこと、訊こうよ。

真琴 そうね。それ訊いとかないかね。

太一郎 会社のこと？

真琴 違う違う。結婚。あ、タブー言っちゃった。

忍 なに？

百子 なんでもない、なんでもない。

縁 いいわよ、そんなこと。

忍 訊いておきなよ。この際だし。

縁 だけど……

相良 僕もその話をしに来たわけですから。

太一郎 どうなんですかね。ここだけの話、姉ちゃん、こんななんですけど。結婚とか、そういうの、どうなんですかね？

全員 ……

相良 かなり前向きです。僕の中では。

全員 おお……

太一郎 いいお告げだ。

相良 はい？

忍 じゃ次、僕の将来は。

百子 (遮って) よかったねえ。

縁 う、うん……

電話が鳴る。真琴が出る。

真琴 (電話中) はい。あ、なんだ。え、もらったひやむぎ？ねえ、

ひやむぎって何処？

縁 誰？

真琴 お母さん。道明寺さん家でお昼いただくつて。で、ひやむぎ持つて来てつて。

縁 こっちに。(立とうとする)

真琴 いいよ。(太一郎に)取って来て、裏庭から手渡してくれない？

太一郎 俺？

真琴 あたしじゃ裏の扉、届かないの。一番、体の長い人がやって。

太一郎 なんだよ、もう。何処。

縁 棚の上。

太一郎、台所へ行き、箱を持って居間を出て行く。

真琴 (電話中)じゃ兄貴が裏から渡すから。じゃね。(切る)

相良 お出かけ中ですか。

忍 帰って来いって言えばよかったのに。せつかく……(相良を見る)

真琴 あ、そうか。

相良 いえ、また日を改めて。

忍 母には見えるんですか？

相良 え？

忍 そういうの、自分ではわからない？

相良 ええと、何が？

百子 麦茶、もう一杯いかがです？

相良 いいですか？

百子 はい。ちよつと二人も来てくれない？

真琴 なんで。

百子 一人じゃ持てないから。

忍 ああ。

百子 真琴姉えも。お願い。いいから。

真琴 なによ。

真琴・忍・百子、台所へ。

縁 うるさくてごめんなさい。

相良 いや、うちの方が。

縁 ああ、ご兄妹多いんですね、相良さんも。

相良、電話台に置いてある花瓶に気づいて立つ。

相良 うちはどうしようもない奴ばかりで。これ、素敵ですね。
（花瓶を手取る）

縁 そんなの、安物です。

相良 背の高い彼ですか？作家っていうのは。

縁 はあ。

相良 すごいなあ。いいなあ。

縁 よっぽど相良さんのほうが文章は上手です。メールとか…

相良 またまた。いつも長くなっちゃって。学生の頃、僕も少し書いたもので、つい。縁さんこそ、いつも素朴なメールで…

（花瓶を眺め）あ、何かいいですね、これ、とっても。

縁 お好きですか。

相良 ええ、こう重みのある物が。こういうのが並んでいる家にしたいなあって思うんです。

縁 いいですね、そんなお家。

二人、見つめて照れ合う。
台所で真琴・忍・百子、麦茶の用意をしている。

真琴 ほら、行くわよ。

百子 待って、お願い、待って。

忍 なんだよ。

百子 …もう話していいかなあ？

真琴・忍 はあ？

台所で三人、しゃがんで話し出す。

相良 ええと、最近ポスト・ペット変わりましたよね？

縁 あ、はい…

相良 ガガンボちゃん。

縁 ババンビです。

相良 そうそう、いやあボブもあなたのとこにすぐ遊びに行っちゃって。まっぴんか。いやあ帰って来ないんですよ。よっぽど居心地がいいんでしょ。いやあ僕がポスト・ペットになりたくらい

で：・

二人、見つめて照れ合う。
真琴・忍・百子、台所の窓から顔を出して、

忍 (裏庭の方へ) 兄貴、兄貴。

真琴 ここからじゃ聞こえないって。

百子 内緒ね、あたしが言ったって、内緒ね。

真琴 何でもっと早く言わなかったの。

百子 だって、だって。

忍 兄貴ー。

真琴 早く教えなきゃ。

忍 ああ。

三人、台所から出て来て、見つめ合う二人を見る。
そうっと居間から出て行こうとする三人。

縁 (三人に気づいて) なに？ 麦茶は？

三人、相良へ曖昧に笑いかけ、そのまま出て行く。

相良 ええと、今の妹さんと弟さんは：・

縁 すぐ下の妹が真琴といって、まだ学生なんですけど：・

相良 ああ、大学院生の。ええと、専門は何ですか？

縁 ええと：・

相良 待って下さい。言わないで。当ててみせましょう。

縁 えっ。

相良 僕が推理します。勘はいいんですよ。(考えて) そうです、文系か理系か。ええ、理系。今、切迫したレポートも、論文を抱えていてかなり焦っている。まあ、レポートもしくも使えるんでしようけど、考えをまとめるまでは手で書いていくタイプ。違いますか。

縁 そうです、当たってます。

相良 当たりました？

縁 すごい、すごいですね。

相良 驚きました？

縁 どうしてわかるんですか。

相良 聞きたい？

縁 教えて。教えて下さい。

相良 いやあ簡単なことです。さっき上着を渡す時、真琴さんのこの辺（手首あたり）に文字が写ってたんです。インクが乾かないうちに触ったんでしょね。数学か物理の記号のような。だから理系かな、と。で、ペンか何かで書いてるんだな、と。だか

縁 なんだ、そうなんですか。でも論文のペ切が近いというのは？

相良 廊下でこれを見つけたんです。（ポケットから紙切れを出す）

縁 いやだ、トイレットペーパー。

相良 ほら、ここにも記号が。

縁 ごめんなさい、こんなの、恥ずかしい。

相良 いえいえ。つまり、トイレでこんなメモをしてしまうほどという

縁 うことですから、かなり追い立てられているのかなって。

縁 はああ、すごいんですね、相良さんって。

相良 いやいや、別に大したことは。

照れながら見つめ合う二人。

縁 あ、甘い物好きですか。

相良 はい、あ、でもお構いなく…

縁 ちょっと待って下さい。

縁、台所へ行く。
ガタガタガタと物音がする。（縁がトリックに掛かった音）

縁（声） たいちろう…

相良 どうしました？

縁（声） 何でもありません、大丈夫です。

相良 でも今、音が。

縁、頭にバケツを被り、濡れて出てくる。

相良 ユカリーナ。

縁 何でもないです、何でもありません。（菓子箱を出す）どうぞ。

相良 ああどうも、でも、それバケツ…

縁 え、あ、これ帽子です。どうぞ、おいしいんですよ、これ。
相良 ……本当に大丈夫なんですか？
縁 何ですか、何か変ですか、私、変ですか。
相良 いいえ、変なんかじゃありません。素敵だ。

二人、見つめ合う。
太一郎、拾った蝮田の眼鏡を持って居間へ入って来る。
同時にメール着信音。太一郎、ついメールを開く。
相良と見つめ合っていた縁、それに気づかない。

太一郎 あっ。

縁 あっ。

太一郎 これ。

相良 どうしました？

縁 たぶん、サービスからの返事。

太一郎 姉ちゃん。

縁 太一郎、あのね。

太一郎 これ何、姉ちゃん。

縁 見ちゃった？

太一郎 なんで黙ってたの。

縁 黙ってるつもりはなかったの。でも恥ずかしいでしょ。

太一郎 そうだよな、照れくさいよな、なかなか言えないよな。

縁 そうなの。言わなきゃとは思ってたんだけど。

太一郎 もっと早く教えてほしかった。

縁 ごめん。

太一郎 姉弟なんだから。

縁 太一郎。

太一郎 だって水臭いじゃないか、まさか姉ちゃんが…ポストペットに俺の名前つけてるなんて。

縁 ……

太一郎 (嬉しそうに) ピンクの象。

縁 ……

太一郎 ピンク・エレファント・タイチロウ。

縁 (棒読みで) 可愛いでしょー?
太一郎 すっげえ可愛い。

真琴、居間へ入って来る。

真琴 あ、兄貴。(廊下へ) いたよ。

縁 死ね。死ね。(ポストペットをクリックしている)

相良 縁さん?

忍・百子、入って来る。

百子 お兄ちゃん。

忍 いたいた、何処にいたんだよ。

太一郎 何だよ。麦茶入れてよ。

真琴 それどころじゃないの。

忍 ちよつと、ちよつと。(引っ張っていく)

太一郎・真琴・忍・百子、部屋の隅へ行く。それに気づかない縁と相良。

相良 死にますよ、縁さん、象、死にます。

縁 いいんです、止めないで。

太一郎 なに。

真琴 落ち着いて聞いて。

太一郎 落ち着いてるって。

忍 びっくりするかもしれないけど。

太一郎 麦茶が切れたのか。

忍 聞いてくれよ。

真琴 お姉ちゃんね、本気で結婚しようとしてる。

太一郎 えっ。

真琴 結婚情報サービスってわかる? 登録すると希望どおりの人を紹介してくれる…

太一郎 本屋の袋によくハガキが入ってる?

百子 それそれ。

真琴 そこに入会したの。

太一郎 姉ちゃんが? (縁を見る)

相良 縁さん、それ、象じゃない、ボブです、ボブ！

縁 ああつ。

相良 遊びに来たのに…

縁 いつのまに入れ替わったの。

相良 ボブ。ええい、ボブの仇。(クリックする)

太一郎 寒気が。

忍 で、そのサービスで紹介された相手が…

太一郎 なに、もう紹介されたのか。

百子 そう。紹介されたどころか…

太一郎 どころか。

真琴 もう家に…

太一郎 もう家に来るかもしれない？なんでそれを早く言わないんだ、姉ちゃん。

縁 きゃっ、いたの？

太一郎 何やってんだよ、ザッシーと遊んでる場合じゃないだろ。

縁 えっ。

相良 ザッシー？

百子 ええと、パソコンの名前です。それ。

相良 ああ。

太一郎 早く歓迎の準備しないと。もう来るかもしれないだろ。

真琴 あのね、兄貴。

縁 来るって？

太一郎 もうしらばっくれなくていいよ。俺、聞いたんだ。

百子 いや、ちゃんと聞いてない。

忍 兄貴、最後までちゃんと聞いてくれ。

縁 なんのこと？

太一郎 俺は歓迎したいんだ。

縁 (キョトンと兄弟姉妹を見廻す)

忍 百子は何も喋ってないって。

縁 あっ喋ったんだ。三万、三万よ、あんた三万。

百子 言っていない、言っていない。

真琴 問題はそこじゃないの。だから兄貴、聞いて：

太一郎 そうだ、問題は麦茶か切れたってことだ。

忍 違うんだよお。

太一郎 じゃあ、客が来るのにどうするんだ。

真琴 だから、もう、目の前に：

太一郎 (目の前を探して) どこに麦茶があるんだよ！

忍 違うんだよお。

縁 一体、何て言ったの、百子。

百子 あたしはちゃんと話したの。

縁 やっぱり言ったんじゃない。三万、出しなさい、三万。

百子 だって、だって。

真琴 (相良を見て) みっともないよ。

相良 お客様がいらっしやるんですか。

太一郎 ザッシー、あんた麦茶買って来てくれない？

相良 は？

百子 (パソコンを掲げ、腹話術のように) うん、わかったなりー。すぐ買ってくるなりー。

縁 たいちろう。

太一郎 なに。

縁 あんたとは一度ちゃんと話さないと思ってってたのよ。

太一郎 待ってたんだよ、その言葉を。何でも相談してよ、姉ちゃん。

縁 (相良に) ちよっと待っててもらっていいですか？

相良 歓迎の準備ですか。で、どなたが？

太一郎 俺たちの新しい兄弟だ。

相良 え、まだ兄弟がいるんですか。

太一郎 あんたも祝ってくれ、ザッシー。

百子 よかったなりー。おめでとうなりー。

縁 (真琴・忍・百子に) あんたたちも。

百子 ちよっと行ってくるなりー。

五人、居間から出て行く。
相良、花瓶を手に取って振ってみたりしている。
床下からガタガタと物音が響く。

蝮田（声） きゃあああ。なにこれなにこれ。

床の抜け穴から蝮田、出て来る。

相良 どうしました。

蝮田 何か後ろから変な生物が……

五人、居間へ走りこんで来る。

縁 相良さん、今のは……

五人 （蝮田を見て）ああっ。

忍 どうして戻って来たんだ。

蝮田 眼鏡、落としたままだったから。すみません、こんなところから。お庭で探していたらいつのまにか、こんな床下に。で、いきなり何かこう飛び掛ってきて……

兄弟姉妹、穴を覗いて、

兄弟姉妹 お爺ちゃん！

縁 （覗いたまま）あっ、逃げた。

太一郎 何なの、この穴。

縁 あんたじゃないの？

百子 （祖父部屋の襖を開け）あっ戻って来た。布団の下から。

太一郎 爺ちゃんが抜け穴を。

蝮田 え、さっきの生物は。

縁 ごめんなさい。本当にごめんなさい。

太一郎 寝たきりもあなどれないな。

真琴 そんなことより、（蝮田に）まだいる気？

蝮田 そうそう、眼鏡はともかく、これ（原稿）のことでお話が。

忍 何だよ、それじゃ納得いかないのか。

蝮田 いえ……

忍 金にならないっていうのか。

蝮田 いえ、そうじゃなくて：・

真琴 いい加減にして。とっとと消えてよ。（蝮田に迫ろうとする）

相良 待って下さい。まだ、いらしたばかりじゃないですか。

真琴 いいんです、この人は。

相良 わかってます、新しい方ですよ？

蝮田 ええ、伺ったのは初めてですけど。失礼ですが：・

相良 僭越ながら、兄と呼んでいただければと思います。

太一郎 はっ？

蝮田 ああ、お兄様ですか。初めまして、（名刺を出そうとする）

相良 堅苦しいのは抜きにしましょう。

蝮田 いえ、性格ですから。私：・

相良 言わないで。当ててみましょうか。

蝮田 当てる？

相良 勘はいいんですよ。きちんとした身なり、厳しさを湛えた目と明解な口調、だが少し顔色があまり良くないような。責任の重い、かなりのハードワークをされている：・

蝮田 ええ。

相良 大変なんですね、看護婦って。

蝮田 違うって言うてるでしょう！

相良 じゃ、何、OL？

蝮田 あんたたち、兄弟そろって私をからかうわけ？

相良 え、じゃ何ですか、仕事は。

蝮田 馬鹿にして。そっちがその気なら：・

蝮田、三角倒立をしようとする。忍、それを止める。

忍 やめろよ！無茶するなって！（相良に）いいじゃないですか、仕事なんて何でも。言いたくないこともありますよ。

太一郎 蝮田さん？

真琴・忍 ええっ。

蝮田 なに？

真琴・忍 ええっ。

太一郎 何だよ、言ったろ、三角倒立の蝮田って。
 縁 今のが三角倒立……
 蝮田 ええと……（目を細めて太一郎を眺める）
 縁 眼鏡、なかったんですか。
 蝮田 ええ。
 太一郎 こんなんでよければ。（ポケットから眼鏡を出す）
 蝮田 （眼鏡を掛けて）うわっ伸びた。これ、私の眼鏡。
 太一郎 まさか、庭に落ちてたやつです。
 蝮田 庭に落ちてたから私のでしょうか？
 太一郎 ん？
 縁・百子 あの、ええと……
 忍 じゃあ、つまり俺は……
 真琴 忍。
 忍 兄貴の担当に手を出しちゃったのか。
 蝮田 何か言ってる。
 太一郎 うわごとです。起きてるうちの半分は気絶してるんで。
 相良 すみません、それでこちらは何番目の……
 蝮田 何番？（原稿を示して）一番よ、一番。今までで一番よ。
 太一郎 えっ、これ。
 相良 一番？ってことは、長女？
 蝮田 長所？長所はそうね、犯人の凶器にこだわりがあるところかしら。多種多様な鈍器がこれでもかと言うほど……
 太一郎 待って下さいよ。これ、どこで手に入れたんですか。
 蝮田 は？ちよっと褒めたからってふざけないで。
 太一郎 だって、これ、俺の作品。
 蝮田 どうとう言ったわね、堂々と俺の作品と言えるレベルってことね。
 太一郎 え、どういうことだ。さっきのこと……じゃ、あの女は……
 真琴 どうしよう、兄貴。あたし今、嫌なこと思いついちやっただ。
 太一郎 俺もだ。
 真琴 さっきのことって、もしかして……

太一郎

畏か、そうか畏だったんだな。

忍

そうだったのか。

蝮田

畏？畏というより、取り立ての腕と呼んでくれるかしら？

相良

借金取り？

蝮田

フリー編集者です。（相良に名刺を渡す）

太一郎

やられた。噂どおり手段を選ばない、恐ろしい人だ。

忍

もう俺は何を信じたらいんだ。

百子

（割って入って）あの、その原稿がなにか？

蝮田

そう、これ。こんな才能があるなんて思わなかった。

縁

面白いんですか。

蝮田

斬新な作品です。たとえば、老人が死に際に残した謎の言葉。

太一郎

ああ：・

真琴

ダイイングメッセージ？

蝮田

いえ、ただの独り言だったんです。

相良

まさか、『ひとりごと殺人事件』？

蝮田

なぜ、タイトルを？

相良

本当ですか。

太一郎

タイトルつけるの苦手で。

蝮田

そうね、少し安易かもしれないわね。

縁

（相良を伺って）どうしたの？

相良

いや、まさか。何でもありません。

蝮田

でも、この並行して進んでいくサイドストーリー、これがまた

相良

サイドストーリー。

蝮田

主人公が趣味で書いている推理小説、これがうまく挟み込まれている。綿密に計算された完全密室の連続殺人、それがあつと

相良

『だけど誰もいなくならなかった』？

蝮田

そう、その通り。

相良

冒頭はこうじゃないですか。「秋茄子は嫁に食わすな」。

蝮田 その通り。その通りだわ。
 相良 それ、僕のだ。たしか高校の時、盗まれた僕の作品です。
 全員 ええっ。
 相良 どうして、あなたがそれを？
 蝮田 どうしてって…
 太一郎 あんた、もしかして、ドンキー？
 相良 うわあ。
 縁 太一郎？
 相良 太一郎。御殿場って、もしかして、あの御殿場？
 太一郎 ドンキーなのか。
 相良 その呼び方はやめろ。
 縁 相良さん？
 太一郎 相良、そうだ、思い出した、相良だ相良、相良不見夫。
 相良 そうか、御殿場ってのはお前ん家だったか。
 太一郎 ドンキー、あんた、いつから妖怪になったんだ。
 相良 失敬だな、お前。
 太一郎 いつから俺のことを監視してたんだ。フロとかトイレとかも覗いてたのか。
 相良 そんな趣味はない。相変わらずわけわかんないやつだ。
 太一郎 妖怪に言われたかない。
 百子 (遮って) ええと、ドンキーって確か。
 縁 まさか高校の…
 相良 こんなこともあるんですね。
 忍 高校。文芸部だっけ。
 真琴 ああ、もしかしてゴーストライター？交換日記の？
 太一郎 言うな。
 相良 縁さんの名字と住所を知って、まさかとは思ったんです。あんまりない名前ですから親戚か何かかと思つて、探りに来てみれば何てことはない、(太一郎に) やっぱり、お前ん家だったか。探りに来ただと？
 太一郎 なるほど、そうかそうか。道理でちやっちいトリックだと思つたぜ。

太一郎 なに。
 相良 妙な気分だがこれも縁だろう。お前にお兄さんと呼ばれることになるとはなあ。
 太一郎 お兄さん？（縁に）何言ってるんだよ、この人。
 縁 こんな弟でもいいんですか？
 相良 もちろん。
 縁 この子の姉だと知って、気持ちは離れてませんか。
 相良 なに言ってるんです。あなたの弟は僕の弟です。
 太一郎 ちよっと待て。どうなってるんだ。
 百子 だからちゃんと聞いてって。
 太一郎 なんなんだよ、聞いてるよ。
 真琴 お姉ちゃんの、紹介相手。
 太一郎 えっ。
 忍 さっき言ったろ、結婚情報サービスのこと。
 太一郎 えっ。
 縁 そういうこと。
 相良 （縁に寄り添って）そういうこと。
 太一郎 なんで、だってあいつ、ザッシー…
 相良 パソコンが？
 百子 （太一郎を叩いて）落ち着いて！よく見てよ、お兄ちゃん、どこからどう見たって相良さんは普通の人間でしょ。
 太一郎 ええっ、だって、お前が…
 忍 冷静になれよ。姉ちゃんの幸せが掛かってるんだ。
 真琴 もう二度とないチャンスだから。
 太一郎 だめ。だめだめ。姉ちゃん、なんでよりによって、こいつなんだよ。
 縁 他にいないから。
 相良 それ、重要。
 太一郎 だってこいつゴーストライターだよ、俺のこと騙したんだよ。
 相良 仕返しに俺の作品盗んだろうが。ワープロごと。
 真琴 え、ワープロ？
 縁 フロッピーじゃなかったの？

太一郎 気がおさまらなかつたんだ。だって、この人が邪魔しなかつたよ、俺とサオリさんは……あつ、サオリさん、どうなつたんだ

相良 もういいだろう。

太一郎 よくない。

相良 聞きたいのか。

太一郎 ああ。

相良 ……（縁を伺う）

縁 聞かせてください。

相良 ずいぶん古い話に戻るけど。俺とサオリが三年、お前はまだ一年だったな。

太一郎 ああ。

相良 確かに俺は交換日記のゴーストライターになってお前を騙したよ。返事が来ないといつて落ち込むであらうサオリにつけ込んで、俺だけに心を開いてもらうはずだったんだ。相談相手から恋人へ。恋愛の黄金パターンだ。

太一郎 はずだった？

相良 ああ。サオリは落ち込まなかつたんだよ。お前から返事が届かなくて。進路のことで手一杯で、お前どころじゃなかつたんだな。

太一郎 あの時、俺は書いたんだよ、いろいろ。進路のこととかよくわかんなかったけど、彼女のことを励まそうと思つて。

相良 全部、読んだ。俺が励まされた。すごく。

太一郎 あんたの悩みに答えてたのかよ。

相良 なかなかいいこと書いていたよ。「あなたの人生列車の乗客はあなた一人です」。

太一郎 やめてくれ。

相良 「どの駅で途中下車しても、たとえ急に思い立って乗り換えをしても」……

太一郎 やめろう。

相良 「終着駅で僕は必ず待っているでしょう」

太一郎 勘弁してくれえ。

太一郎の文章を聞いて皆、悶えている。特に忍、朦朧としている。

真琴 忍、しっかりして。

忍 大丈夫。何とか。

百子 ある意味、彼女に届かなくて良かった。

相良 その言葉に励まされた俺は、

全員 ええっ。

相良 俺は決心した。サオリとともに人生を歩もうと。同じ大学へ進み、同じように保育士の資格を取り、いろいろ汚い金も使ひ、何とか同じ保育園へ潜り込むことができた。

忍 できたんだ。

相良 二人の仲は順風満帆に思えた。年取った保母と子供と、若い母親ばかりの保育園では、他に会う若い男もなく、俺は安心してきつていた。ただ：

真琴 ただ。

相良 時折、警察が俺のところに来て、「今じゃストーキングは立派な犯罪ですからね」とか、険しい顔で忠告をしていくことがあったから、あいつも陰で男から言い寄られていたのかもしれない。

百子 …お二人は付き合ってたんですね？

相良 しっ！ ここからが大事な話です。安心しきっていた俺は、重要なことを忘れていた。

忍 重要？

相良 保育園の伏兵。奇襲部隊。若くして妻を亡くした子連れヤング。エグゼクティブ。これにはサオリもひとまりもなかった。国家公務員。しかも第一種。

忍 (呻いて) ああ…

相良 仕事という意識が同僚へ、そして愛へと変わるのに時間は掛からなかった。悔しかった。お菓子教室にも一緒に通った。なにが国家公務員だ。子供の形取らせたら俺のほう絶対、上手いのに。毎月やってくるから。あと、折り紙でチェーン作らせてみる、一晩ですごい長さになるぜ。ハワイまで届くなら、確実に。

忍 その女もいつか後悔すると思う。

真琴 思わない。

相良 (忍に) ありがとう。

百子 (こっそりと縁に) 本当にこの人でいいの？

縁 …(相良の話に聞きほれている)

太一郎 それじゃサオリさんは。

相良 辞めたよ、三ヶ月前。

縁 それでその人と？

相良 おそらく。

太一郎 おそらく？

相良 だって教えてくれないんだよ。誰も。サオリの新しい住所も電話番号も。本人から連絡ないし。俺が訊いても周りの誰も教えてくれないんだよ。

忍 ひどいな。

蝮田 組織なんてそんなものよ。

縁 もしかしてそれがショックで、入会を？

相良 新たな出会いがあれば、立ち直れるかと思って。

太一郎 で、何でそれが姉ちゃんなんだよう。

相良 コンピュータに聞け。相性度九十七パーセント。

縁 会員六万人の中から。六万分の一の、あなた。

相良 はい。

太一郎 姉ちゃあん。

忍 いいじゃないか、相良さん、いい人じゃないか。

縁 忍。

真琴 九十七パーセントじゃ仕方ないね。

百子 どうせ二人でよそこに住むわけだし。

真琴 そうね。こんなお姉ちゃんदैいって言うてるし。

忍 いいと思うよ、俺。いいと思うな。

皆、太一郎を見る。太一郎、険しい顔で押し黙ったまま。

相良 困ったなあ。せっかくなかったことにしようと思ったのに。ワープロ盗んだこと。

太一郎 うわ。

相良 君が発表した作品のうち、いくつが僕の作品なんだろうね。

太一郎 うわあ。

百子 だから売れなかったんだ。

真琴 しっ。

蝮田 いえ、売れるわ、これからは。つまり、これはお兄さんの作品なのよね？

相良 昔のですけど。

蝮田 今でも書ける？

相良 ええ、書き溜めたものも少し。

蝮田 それ全部、私に預かせてくれない？

相良 えっ。

蝮田 いけると思うの。どう？

相良 喜んでお任せします。

真琴 (蝮田に) いいんですか？

蝮田 イチかバチか、賭けに出るわ。

百子 待って。じゃ、お兄ちゃんは？

蝮田 ……

百子 そんな。

太一郎 いいよ、モモ。

百子 だって。

全員 ……

相良 (蝮田に) いいですか？

蝮田 なに。

相良 二つだけ、条件をつけさせて下さい。

蝮田 二つ。

相良 一つ、著者名は今まで通り、彼の名前で。僕の名前は表に出さないで下さい。

縁 相良さん。

太一郎 ドンキー。

相良 (太一郎に) それはやめろ。(蝮田に) それでもいいですか？

蝮田 あなたがそうしたいなら。

太一郎 どういうつもりだ。

相良 いつか実力をつけて、ゴーストライターの俺を追い越してみせろ。

太一郎 ドンキー。姉ちゃんのこととはあんたに任せるよ。

縁 太一郎、認めてくれるの？

忍、拍手。真琴と百子、渋々拍手。

蝮田 もりあがってるところ、ごめんなさい。で、もう一つの条件って
 いうのは？
 相良 ああ、原稿料のことですけど。
 蝮田 そうくると思った。私、フリーになったばかりで期待に添える
 かわからないけど。
 相良 とりあえず、即金で。
 忍 結婚資金？
 蝮田 希望は。
 相良 三十六万。
 百子 あれ、どこかで聞いた金額。
 蝮田 半端な数字ね。
 相良 月々一万、三十六回払いでもいいです。
 真琴 即金じゃないの？
 相良 あなたに損はさせませんから。
 蝮田 自信ありってこと。嫌いじゃないわ、そういうの。…じゃあ、
 今日のところはこの辺で。
 太一郎 待って下さい、お茶でも。
 蝮田 でも。
 太一郎 いいですから。姉ちゃん、何か作ってよ。
 縁 あ、うん。
 太一郎 ほら、真琴、ちやぶ台。
 真琴 うん。
 太一郎 忍は座布団。
 忍 うん。
 太一郎 モモは兄ちゃんの横な。
 百子 うん。(相良に)どうぞ。(太一郎の横に相良を座らせる)
 縁 どうしよう、そうめんくらいしかないけど。
 百子 またあ。
 太一郎 いいよ、そうめん。
 相良 でもお父さんとお母さんがまだ…
 縁 当分、帰って来ないと思うんで。

相良　　そうですか。じゃあ、もし良ければ家に来ませんか？

縁　　ええっ。

相良　　うちの母、料理が大好きで。隣の駅ですし。こんなに大勢来るって言ったたら、喜んで腕をふるうと思います。

縁　　でもご迷惑じゃ。

相良　　元々、うちも大人数なんで。

太一郎　　あ、そうだ、思い出した。あんたも兄弟が多くて、しかもすぐ中途半端な位置に：・

相良　　九人兄妹の四男。

真琴・忍・百子　　うわっ。

太一郎　　そうだそうだ。

縁　　似てますか？

相良　　顔はあまり。性格はそっくりって言われます。九人とも。

真琴・忍・百子　　うわっ。

相良　　じゃ、電話してみます。(携帯を取り出す)

蝮田　　いいんですか、私まで。

相良　　どうぞどうぞ。ぜひ感想も伺いたいし。

蝮田　　作品の？

相良　　い、え、僕の家。(太一郎に) お前も絶対、来い。

太一郎　　ああ。

縁　　感想って、なんですか？

忍　　新築とか？

相良　　まさか。うちの中に入ってからの感想ですよ。こう言っただけです。僕がうちに仕掛けたトリックは、ここん家みたいでヤワなもんじゃありませんから。(太一郎に) お前のちやっさいトリックにユカリナはもう飽き飽きしてるんだよ。(縁に) ね、ユカリナ、僕たちの新居はウルトラ・からくり・スイートホームにしましょうね。

縁　　：・

相良　　(携帯をかけて) あ、もしもし、俺、不見夫。あのさ、急なんだけども、これから大勢連れて帰るから：・

とても不吉な曲が流れて来る。
六人は脱力したように座り込んだまま、朦朧としている。

太一郎 だから最近、素っ気なかったのか……

相良 (電話中) うん、結構大勢。何か作っておいてよ。いや、近く、隣の駅……

百子 ねえ、見当たらないんだけど、ザッシー。

兄弟姉妹 ……

百子 本物のザッシー。いなくなっちゃったみたい。

相良 (電話中) OK、OK、うん今すぐ。(兄弟姉妹に) ちよつとすみません、音、小さくしてもらえませんか？(電話に) もしもし、え、何？(祖父部屋に) お爺さん、お爺さん、お爺さん、(電話に) え、何？(兄弟姉妹に) あ、の、すみません。(電話に) もしもし何？(祖父部屋に) お爺さん、お爺さん……

不吉な曲、だんだん大きくなっていく。
縁、冒頭と同じく苦悶の表情で空を見つめている。

全員、疲れ果てたように動こうとしない。
さらに音は大きくなり、だんだん照明が消えていく。

相良だけが動き、「帰るから」「お爺さん」などと叫んでいる。

やがて音楽が一際、大きくなり、

完全暗転。

終

【上演許可申請について】

本作品の著作権（上演権・映像化権などを含む）は石原美か子に帰属し、無断上演は禁じます。上演を希望する場合は以下の情報を記載の上、連絡先までお問い合わせ下さい。

- ・上演を希望する作品名
- ・団体名
- ・上演目的（第〇回公演、高校演劇大会など）
- ・上演期間
- ・上演回数（ステージ数）
- ・会場名および座席数
- ・入場料金
- ・上演責任者（団体代表者）
- ・団体または責任者の住所（上演許可証の送付先）
- ・作品内容の変更あり／なし

【連絡先】 石原美か子事務所

office (メール) ishiharamikako.com

(メール)を@こ直して送信願います。

また公式サイトにも上演許可申請について記載しています。

石原美か子ウェブサイト <http://www.ishiharamikako.com/>